三重県埋蔵文化財調査報告２３８－１

近畿自動車道尾鷲勢和線（紀勢～勢和間）埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ

粟　生　城　跡

－三重県多気郡大台町－

２００２．１１

三重県埋蔵文化財センター

粟生城跡

二〇〇二年十一月　三重県埋蔵文化財センター

調査風景（西から）

ＳＦ７（北西から）

序

熊野街道は、古くは熊野詣や西国三十三ヶ所等、信仰の道として多くの人々が往来していました。現代においては風光明媚な南紀への観光の道としての利用が加わり、ＪＲ紀勢本線や国道42号線に姿を変え、多くの往来が続いています。しかし、その道は急峻な山岳に阻まれ、峠また峠の険しい道で、ＪＲ紀勢本線や国道42号線の整備が戦後にまで及んでいるように、近代以降においてもその険しさに変わりはありません。

人や物の移動が自動車を中心として行われる現代、唯一の自動車交通路である国道42号線に加え、高速道路の建設が計画されました。この建設予定地には、いくつかの埋蔵文化財包蔵地が発見されています。これらの埋蔵文化財は、私たちの先祖が、その時代を生きた証であり、先人の文化や教訓等を今に伝えてくれる貴重な財産ともいえます。三重県埋蔵文化財センターでは、この様な埋蔵文化財を開発行為から守り、後世に伝える努力を続けているところであります。

日本道路公団においては、こうした趣旨を十分理解していただき、その保護に努めていただいたところではありますが、どうしても現状保存困難な部分については、発掘調査を行い、記録として保存することになりました。粟生城跡の発掘調査は、こうした経緯で行われたものです。本書が消滅した遺跡に代わり、先人の文化や教訓を後世に伝える一助となることを願うものであります。

なお、文化財保護法の精神を尊重され、協議から発掘調査に至るまで多大のご理解とご協力をいただいた日本道路公団中部支社をはじめとする各関係機関の方々、地元粟生区自治会の方々に、心からのお礼を申し上げます。

2002年11月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　　吉　水　康　夫

例　　言

1．　本書は、三重県多気郡大台町粟生字盆ノ上に所在する粟生城跡の発掘調査報告書である。
2．　本書が扱う調査成果は、『近畿自動車道尾鷲勢和線（紀勢～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』としてその概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。
3．　調査は下記の体制で実施した。
　　・調査主体　　三重県教育委員会
　　・調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第二課
　　主査兼第三係長　森川常厚
　　・調査作業受託者　安田建設株式会社
4．　本書の執筆・編集は、森川常厚が行なった。写真撮影は、調査作業受託者および森川常厚が担当した。
5．　本書が対象とした調査面積は、1,600㎡である。
6．　本書が対象とした現地調査期間は、平成13年６月21日から平成13年11月20日である。
7．　本書で示す方位は、国土座標第Ⅵ系を基準とする座標北を用いた。なお、磁北は約６°30′西偏（平成10年、国土地理院）している。
8．　本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。
　　ＳＡ：土塁　　ＳＤ：堀　　ＳＦ：焼土坑　　ＳＺ：その他
9．　本書で表記する色調は、小山・竹原編『新版標準土色帖』（９版　1989）を使用した。
10．　本書第４図に使用した縄張図は伊勢中世史研究会（竹田憲治・奥野実）による。
11．　発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々のご指導・ご協力をいただいた（敬称略）。
　　伊藤裕偉　　木下良樹　　小玉道明　　小林　秀　　辻　　昇　　筒井正孝　　出口圭一
　　中井　均　　中瀬秀夫　　藤澤良祐　　古川久雄
　　伊勢中世史研究会　　日本道路公団中部支社松阪工事事務所
　　三重県県土整備部道路整備課高速道推進室　　三重県土地開発公社高速道松阪支所
　　大台町教育委員会　　粟生区自治会　　地元地権者各位
12．　本書が扱う発掘調査の原因事業は、近畿自動車道尾鷲勢和線（紀勢～勢和間）建設事業である。
13．　発掘調査の経費は、日本道路公団中部支社が負担した。
14．　本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、当三重県埋蔵文化財センターが保管している。

目　　次

Ⅰ．前言 …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査の体制 …… 1
　3．調査の経過 …… 1

Ⅱ．位置と環境 …… 2
　1．地理的環境 …… 2
　2．歴史的環境 …… 2

Ⅲ．現況と層序 …… 7
　1．現況 …… 7
　2．層序 …… 7

Ⅳ．遺構 …… 11
　1．構造 …… 11
　2．曲輪Ⅰ …… 11
　3．曲輪Ⅱ …… 18
　4．曲輪Ⅲ …… 18
　5．曲輪Ⅳ …… 19
　6．曲輪Ⅴ …… 19
　7．曲輪Ⅵ …… 19

Ⅴ．遺物 …… 20
　1．ＳＺ３出土遺物 …… 20
　2．包含層・表土他出土遺物 …… 20

Ⅵ．結語 …… 26
　1．遺物 …… 26
　2．城の存続時期 …… 28
　3．城館構造 …… 28
　4．城主 …… 30
　5．おわりに …… 31

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　遺跡地形図 …… 4
第３図　調査区位置図 …… 5
第４図　縄張図 …… 6
第５図　調査前測量図 …… 8
第６図　遺構平面図 …… 9-10
第７図　南西～北東土層断面図 …… 12
第８図　東西土層断面図 …… 13
第９図　南北土層断面図 …… 14
第10図　曲輪Ⅰ平面図 …… 16
第11図　SA4断面、SZ3・8実測図 …… 17
第12図　SF1・2・7実測図 …… 18
第13図　SZ3出土遺物実測図 …… 20
第14図　遺物実測図 …… 21
第15図　遺物実測図 …… 23
第16図　個体数比較図 …… 27
第17図　出土遺物分布図 …… 29

写　真　図　版

巻頭図版 …… 調査風景
…… ＳＦ７
ＰＬ　1 …… 調査前風景
ＰＬ　2 …… 近世熊野街道から粟生城跡を望む
…… 粟生集落から粟生城跡を望む
ＰＬ　3 ‥中世熊野街道想定地から粟生城跡を望む
…… 曲輪Ⅰ調査前風景
ＰＬ　4 …… 調査区全景
ＰＬ　5 …… 調査区全景
ＰＬ　6 …… 調査区全景
ＰＬ　7 …… 曲輪Ⅰ全景
…… ＳＡ４･ＳＤ５
ＰＬ　8 …… 曲輪Ⅰ
ＰＬ　9 …… 曲輪Ⅰ
…… ＳＡ４
ＰＬ 10 …… ＳＡ４
…… ＳＡ４石積
ＰＬ 11 …… ＳＦ２断面
…… ＳＦ１断面
ＰＬ 12 …… ＳＦ1･2
…… ＳＦ１
ＰＬ 13 …… 曲輪ＩとＳＦ1･2
…… ＳＦ1･2
ＰＬ 14 …… ＳＺ８
ＰＬ 15 …… ＳＺ３
…… ＳＺ３遺物出土状況
ＰＬ 16 …… ＳＺ３出土遺物撤去後
ＰＬ 17 …… ＳＤ５
…… ＳＤ５断面
ＰＬ 18 …… ＳＤ５
ＰＬ 19 …… ＳＤ５
ＰＬ 20 …… ＳＤ６
…… 曲輪Ⅱ・Ⅲ全景
ＰＬ 21 …… 曲輪Ⅱ全景
…… 曲輪Ⅱ
ＰＬ 22 …… 曲輪Ⅱ転石出土状況
…… 曲輪Ⅱ土層
ＰＬ 23 …… 曲輪Ⅱから曲輪Ⅰを望む
…… 曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面遺物出土状況
ＰＬ 24 …… 曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面遺物出土状況
…… 曲輪Ⅳ・Ⅴ全景
ＰＬ 25 …… ＳＦ７
ＰＬ 26 …… 曲輪Ⅴから曲輪Ⅰ・Ⅲ・Ⅳを望む
…… 曲輪Ⅵ
ＰＬ 27 …… 曲輪Ⅵ
…… 帯曲輪状通路

ＰＬ 28 ･････････････････ 帯曲輪状通路と曲輪Ⅲ
･････････････････ 帯曲輪状通路と曲輪Ⅵ
ＰＬ 29 ･････････････････････ 曲輪Ⅰ調査風景
･････････････････････ 現地説明会風景
ＰＬ 30 ･････････････････････････ 出土遺物
ＰＬ 31 ･････････････････････････ 出土遺物
ＰＬ 32 ･････････････････････････ 出土遺物

表　目　次

第１表　遺跡一覧表 ･････････････････････････3
第２表　遺物観察表 ･････････････････････24～25

Ⅰ．前　　言

１．調査に至る経過

近畿自動車道尾鷲勢和線（紀勢～勢和間）は、平成３年12月に整備計画が決定され、平成５年11月に施行命令が出された。これに基づいて、日本道路公団名古屋建設局松阪工事事務所から平成９年１月30日付名建松工第26号により、遺跡確認の依頼があった。これを受けて三重県埋蔵文化財センターでは、路線予定地の埋蔵文化財について、現況観察をもとに調査を行い、平成10年３月６日付教埋第636号にて、18ヶ所の遺跡を報告している。しかし、粟生城跡は雑木に阻まれ、また、城跡の伝承等も無かったため発見できず、この報告から漏れることとなった。

平成13年２月、大台町粟生地区では用地買収に伴い木材の伐採が開始され、山の形状が明らかになりつつあった。この形状に疑問を感じた県民からの連絡[①]により、現地確認を再度行うこととなった。日本道路公団中部支社松阪工事事務所から平成13年３月12日付中部支松工第142号による依頼を受けて調査を開始したところ、堀切や５ヶ所の曲輪状の地形を発見した。この結果は、平成13年３月26日付教埋第405号において中世城館「粟生城跡」として日本道路公団に報告し、三重県教育委員会では新発見遺跡として登録を行った。その後、伊勢中世史研究会により縄張図が作成され、その際に新たな曲輪状地形[②]が発見されている。

２．調査の体制

調査は、三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センターが担当した。現地調査作業は民間調査会社に委託するかたちで実施したが、三重県埋蔵文化財センター調査担当者が監督員として現地に常駐した。この調査体制は、近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査において県内で初めて導入されたもので、仕様については当該発掘調査報告書[③]に記されている。ただし、遺物洗浄等の一次整理以降の作業においては、作業委託を行わず、室内作業基地『玉城整理所』に駐在して作業を行った。

３．調査の経過

現地発掘調査作業は安田建設株式会社が受託し、６月21日に開始し、文化財保護法第58条の２第１項の規定により平成13年７月５日付教埋第109号にて「発掘調査の報告」を三重県教育委員会へ行った。調査はまず、調査区への比高80ｍの登山道の整備から開始せざるを得なかった。この登山道は事業地外にあたるため、地元自治会の承諾のもとに、これを使用した。調査は酷暑のため難航し、また、調査終盤に至って、焼土坑や石積遺構等の検出が相次いだため、当初予定を１ヶ月以上延長して11月20日に終了した。この間、10月14日には現地説明会を開催し160名の参加を得、10月26日には地元川添小学校1～3年の児童及び教師26名が見学に訪れた。

なお、出土遺物については、三重県教育委員会から平成14年1月18日付教ス生8−7号にて地元警察へ発見認定が通知されている。

［註］

① 小玉道明氏（三重県史編さん専門委員）の助言が発見の契機となった。

② 竹田憲治　『伊勢の中世 第６０号』　伊勢中世史研究会　平成13年５月７日

③ 森川幸雄　「Ⅰ前言」『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター　2002年３月

Ⅱ．位置と環境

１．地理的環境

粟生城跡（５）は三重県多気郡大台町粟生字盆の上に所在する。この大台町は三重県の中央部、旧伊勢国南端ちかくに位置し、周囲は紀伊山地東部の標高700～800m程の山々に囲まれる。この紀伊山地から伊勢湾へは、三つの一級河川が注ぎ出るが、そのなかで最大の宮川が、町内を縦断する。上流部ではあるものの、この宮川に沿って数珠玉状に小規模な平野が連なる。これらの平野は、当然のごとく周囲を山で囲まれた盆地であり、地形的には各個が独立した状態を示す。粟生城跡の所在する多気郡大台町川添地区周辺は、これらの盆地のひとつであり、500×1,500mの広がりをもつ。町内では、三瀬谷周辺、栃原周辺に次ぐ３番目の広さになり、宮川上流部では比較的大きな平坦面を確保している。四方を標高500m前後の山に囲まれ、山麓を近世熊野街道が、中央部をＪＲ紀勢本線と国道42号線が貫通し、古くから現代に至るまで熊野方面への交通路に位置している状況に変化はない。

粟生城は、川添地区北部の山地から盆地に向かって派生した尾根の先端部付近に立地し、現況は山林である。この尾根は、風化の進んだ岩山で、随所に岩盤が露呈している。斜面は急峻で、麓の平野との高低差は約80mである。粟生城跡に立てば、この盆地を一望に見渡すことができ、さらに、麓の熊野街道を往来する人々を識別することが可能である。

２．歴史的環境

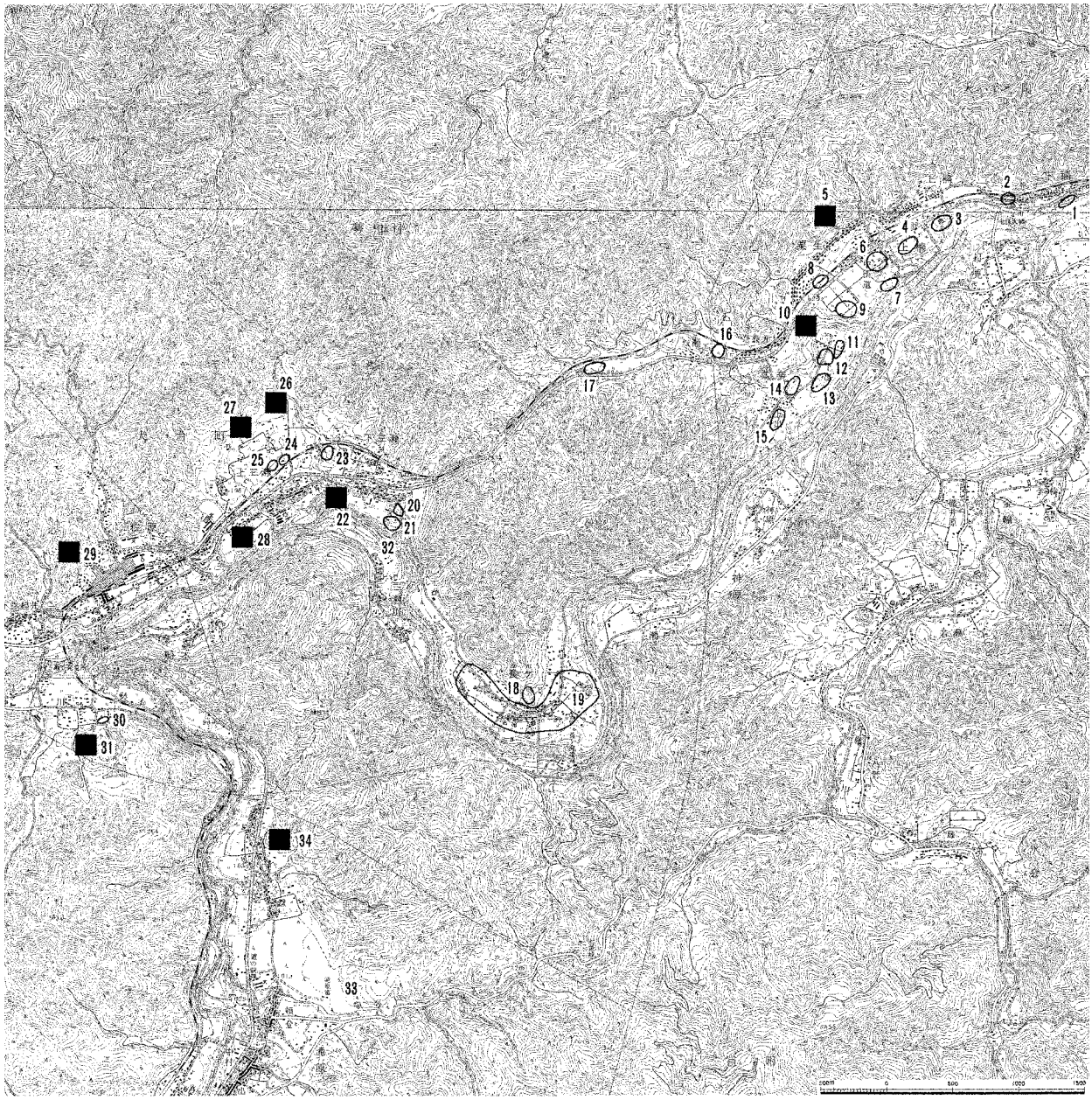
大台町の位置する奥伊勢地域は大規模な開発事業が少なく、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査例も必然的に少ない。しかし、大台町内の遺跡については、皇學館大学考古学研究会が行った遺跡詳細分布調査により、その様相をある程度知ることができる。調査結果[①]によれば、町内には新発見を含め59ヶ所の遺跡があり、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が中心のようである。旧石器時代の遺跡は、久保遺跡（11）、神戸北遺跡（20）、出張遺跡等があり、三重県下において最も高密度な分布を示している。昭和52～53年に行われた出張遺跡の発掘調査[②]ではナイフ型石器等が多量に出土し、旧石器時代の遺跡として当遺跡を全国的に有名なものにした。

続く縄文時代においても遺跡の分布密度は高く、町内の遺跡数の半分を占める。縄文時代各時期のものが採集されており、特に、北東部の栃原周辺がより高密度である。これは、この地域が隣接する櫛田川流域に最も近く、交易ルートのジャンクション的な位置に相当するものと考察されている[③]。

弥生時代にはいると状況は一変し、林地遺跡（13）で後期の遺物が採集されているものの、町内で４ヶ所程度が知られるに止まる。この状況は古墳時代に入るといっそう顕著になり、落人古墳群で３基の古墳が知られるのみで、さらに律令期においては全く知られていない状況である。

中世にはいると遺跡数は再び増加する傾向にあるが、伊勢平野と比べて決して多いとは言えない状況である。これは居住可能地域が地形上限定されるため、現集落との重複が一因するものと考えられる。そのなかで、古瀬戸の蔵骨器が壁土採集の際に出土した長ヶ中世墓群（18）や長ヶ遺跡（19）が注目される。

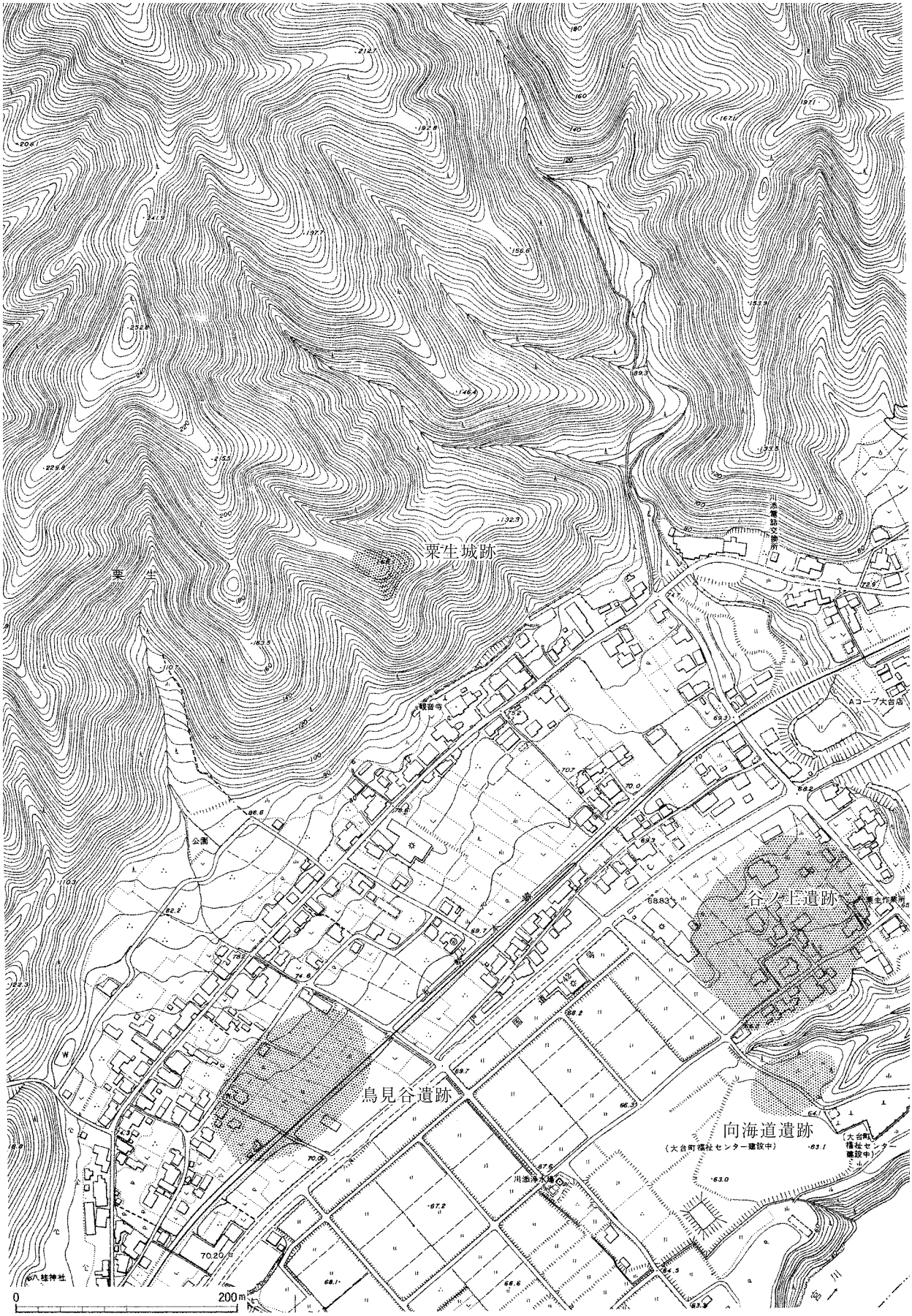
伊勢神宮領との関係は古代から深く、隣接する大宮町には内宮の別宮の滝原宮（33）が設置され、『神鳳鈔』には「粟井御薗」とあり、粟生城跡周辺は伊勢神宮領であった[④]ようである。また、熊野信仰に伴い熊野街道が整備されたが、当時の熊野街道は、粟生付近では近世熊野街道よりやや南の盆地中央部を横断していた[⑤]。その後、南北朝の動乱のなかで南朝側の中心勢力として北畠氏が勢力を伸ばす結果となる。この北畠氏が16世紀には戦国大名として領国支配を強化し、大台町周辺もそれに組み込まれるよ



第１図　遺跡位置図（1:50,000）『この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図（伊勢佐原・横野）を掲載したものである。』

番号	名　　称	時期	番号	名　　称	時期	番号	名　　称	時期
1	下楠遺跡	縄文	13	林地遺跡	弥生	25	上三瀬遺跡	縄文
2	下楠西遺跡	—	14	浜井場下出遺跡	縄文・中世	26	茶臼山砦	中世
3	川添遺跡	—	15	高瀬遺跡	縄文	27	北畠具教三瀬館址	中世
4	西ノ谷遺跡	中世	16	板瀬遺跡	縄文	28	油谷西村館址	中世
5	粟生城跡	中世	17	ケヤ谷遺跡	縄文	29	佐原城跡	中世
6	谷ノ上遺跡	縄文・弥生	18	長ヶ中世墓地群	中世	30	東前遺跡	中世
7	向海道遺跡	縄文	19	長ヶ遺跡	中世	31	川合城跡	中世
8	ウツ野遺跡	縄文・中世	20	神戸北遺跡	旧石器・縄文	32	三瀬の渡し	中世
9	鳥見谷遺跡	縄文	21	神戸遺跡	—	33	滝原宮	中世
10	奈良井城址	中世	22	下三瀬城址	中世	34	野後城	中世
11	久保遺跡	旧石器・縄文	23	中野遺跡	縄文			
12	称名院前遺跡	中世	24	上三瀬東遺跡	縄文			

第１表　遺跡一覧表

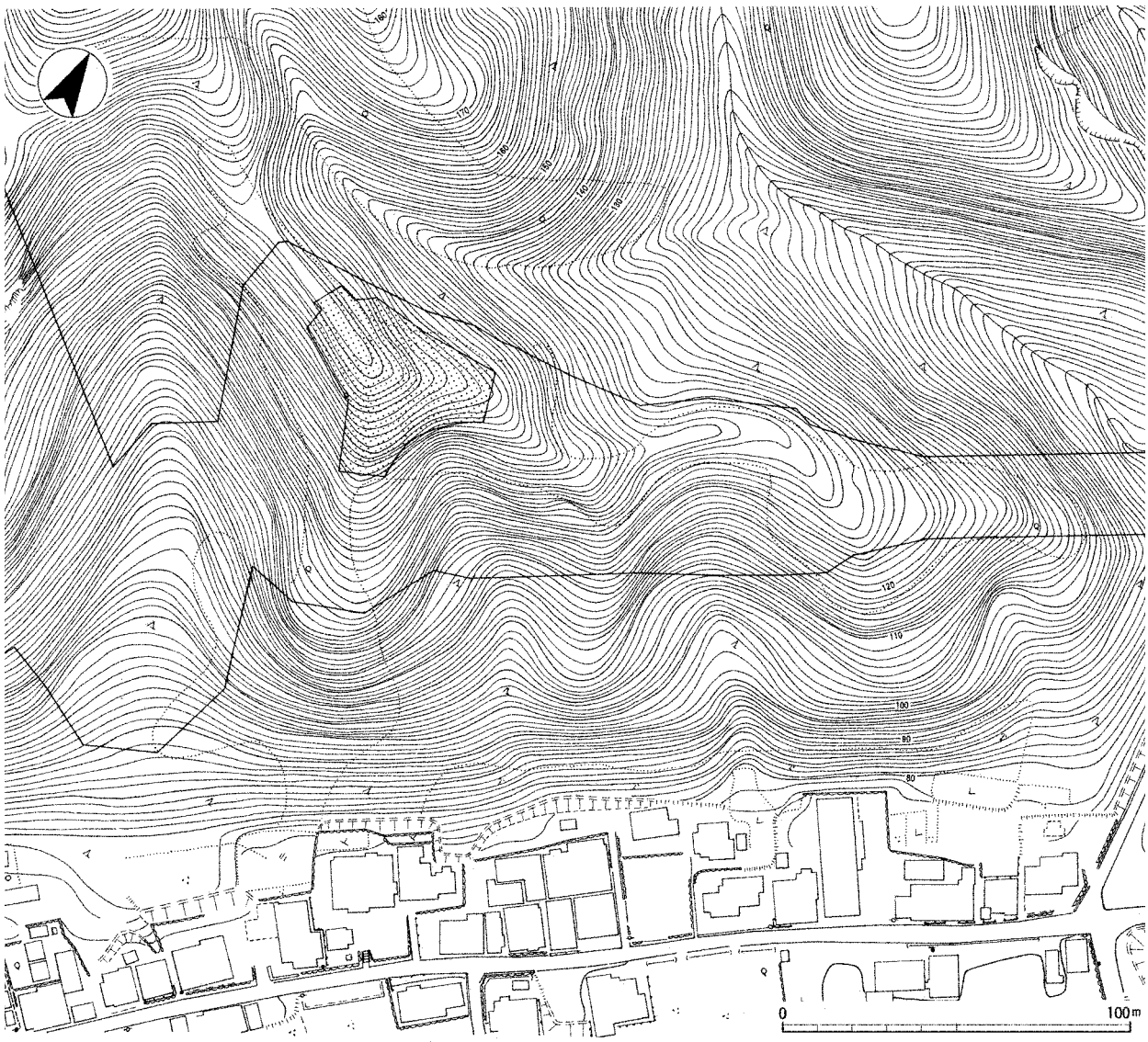


第２図　遺跡地形図（1:5,000）

うであるが、まもなく、織田信長の侵攻によって北畠具教は三瀬館に隠居する[6]ことになる。

さて、町内にも北畠氏関連の伝承をもつものを含む中世城館がいくつか知られている。北畠具教三瀬館址（27）は、具教が信長侵攻後、居城としたとされ、多数の階段状の平坦面が谷間や背後の山頂に認められる。この丘陵上には茶臼山砦（26）もあり、付近には具教の胴塚と伝えられるものもある[7]。下三瀬城址（22）は、その南東900mの宮川への段丘縁にあり、自然の要害を巧に利用した立地であるが、構造は土塁を四方に巡らした郭が2連の方形居館である。北畠の家臣、三瀬左京が城主と伝えられるが、長野左京とする説、両者は同一人物とする説等多様である。これより700mほど下流の宮川高校敷地には油谷西村館址（28）の存在が伝えられている[8]。川合城跡（31）は粟生城跡と類似した立地で、町内で初の本格的発掘調査が行われた城館である。粟生城跡と同様に背後の丘陵から続く尾根を堀切で切断し、数ヶ所の曲輪状遺構を配置している。しかし、出土遺物が皆無[9]で築城時期等詳細な資料は得られなかった。さらに、同様な山城としては佐原城跡（29）が新発見されている。浅間山の山頂に位置し、堀切と数ヶ所の曲輪で構成されている[10]。これらの城館は、三瀬谷を中心とする盆地やその周辺の丘陵に位置している。三瀬谷周辺は現在、奥伊勢地方で最も商業の発達した地域であるが、中世においても当地方の中心地であったようである。

一方、粟生城跡の所在する川添地区では、その南西800mに奈良井城址（10）がある。平地の居館で、立地は下三瀬城址と酷似するが、構造は2ヶ所の堀の



第3図　調査区位置図（1:2,000）

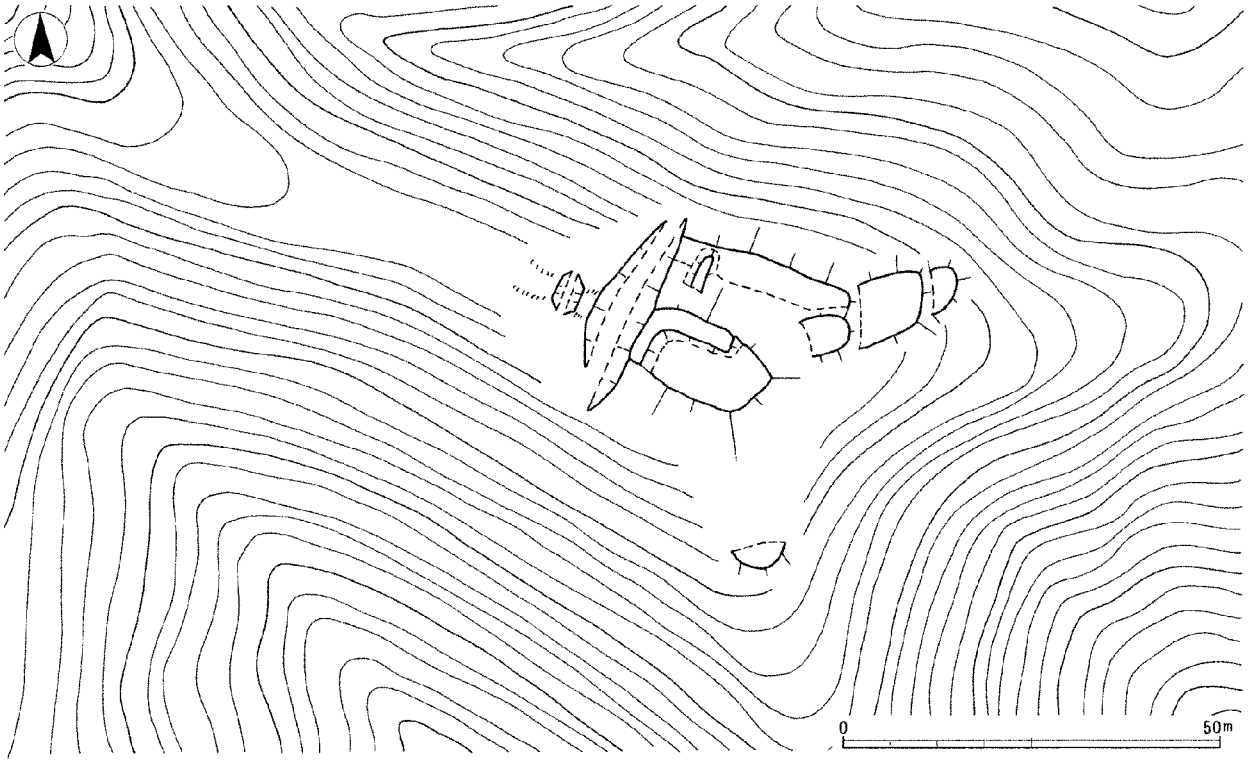
他は自然地形をそのまま利用した不整形なもので、土塁等は無い。また、粟生城背後の丘陵にもいくつかの平坦面がある[11]ようであるが、詳細は不明である。

このように、城館の分布密度からすれば、川添地区は三瀬谷地区の下位に位置付けられるが、既述したものも含め、近年、奥伊勢地域では城館の新発見が相次いでおり[12]、当地域の歴史観を大きく変えることになるかも知れない。

江戸時代には紀州徳川氏により熊野街道は再び整備される。粟生には伝馬所が設置[13]され、交通の要所と位置付けられている。また、現代の交通網が整備されるまでは粟生付近で船に乗り、宮川を下って参宮していた[14]とされ、水運の拠点でもあったようである。このような近世から近代の状況は、ある程度は中世にさかのぼり得るものと考えられる。

[註]

① 皇学館大学考古学研究会 『大台町の遺跡』 大台町教育委員会 昭和50年３月14日
② 三ツ木貞夫他 『出張遺跡発掘調査報告』 大台町出張遺跡調査会 1979年２月
③ 前掲①に同じ。
④ 西山克他 「多気郡」『三重の地名』 平凡社 1983年５月20日
⑤ 戸田真樹 「４ 相鹿瀬から下三瀬」『歴史の道調査報告書Ⅰ』 三重県教育委員会 昭和56年３月
⑥ 栗谷節ニ 「第二章中世」『大台町史 通史』 大台町 平成八年三月三十一日
⑦ 奥 義次・岩中淳之・垣内 祥 「北畠具教三瀬館跡」『三重の中世城館』 三重県教育委員会 1976
⑧ 前掲①に同じ。
⑨ 下村登良男 『川合城跡発掘調査報告』 大台町教育委員会 2001.3
⑩ 竹田憲治 『伊勢の中世 第73号』 伊勢中世史研究会 平成14年３月１日
⑪ 古川久雄・筒井正孝氏の御教示による。
⑫ 当地域では、伊勢中世史研究会や北畠充生氏等の研究者による調査活動が活発に行われている。
⑬ 樋田清砂 「熊野街道の歴史的特性」『歴史の道調査報告書Ⅰ』 三重県教育委員会 昭和56年３月
⑭ 辻 昇氏の御教示による。



第４図 縄張図(1:100)

Ⅲ．現況と層序

１．現況

粟生城跡の現況は山林である。この山林は、植林された針葉樹林が主であるが、城跡付近から集落にかけての斜面は、落葉広葉樹や笹等に覆われ、見通しが困難な現況である。また、この尾根は、風化の進んだ岩山で、随所に岩盤が露呈している。集落側の斜面は急峻で、40°以上の角度をもち、斜面に立つのが困難である。ただし、城館跡北側の谷に向かう斜面は比較的緩やかである。この谷を流れる谷川は、小規模ではあるものの比較的流量が豊富で、雨天の後は10日程度の間、谷水を得ることができる。さらに下れば、流量が豊富な谷川に合流し、この谷川の水は枯れることはない。

麓の平野との高低差は約80ｍで、山林が切り倒された現在、城館跡からは眼下の盆地を一望に見渡すことができ、既述したように、麓の熊野街道を往来する人々を識別することが可能である。

谷を隔てた西側にも同様な尾根が盆地へ張り出している。この尾根からは、粟生城を見下ろすことができるが、曲輪や堀切のような地形改変は認められない。浅間神社の祠があり、その周辺に僅かな平坦面が認められるのみである。

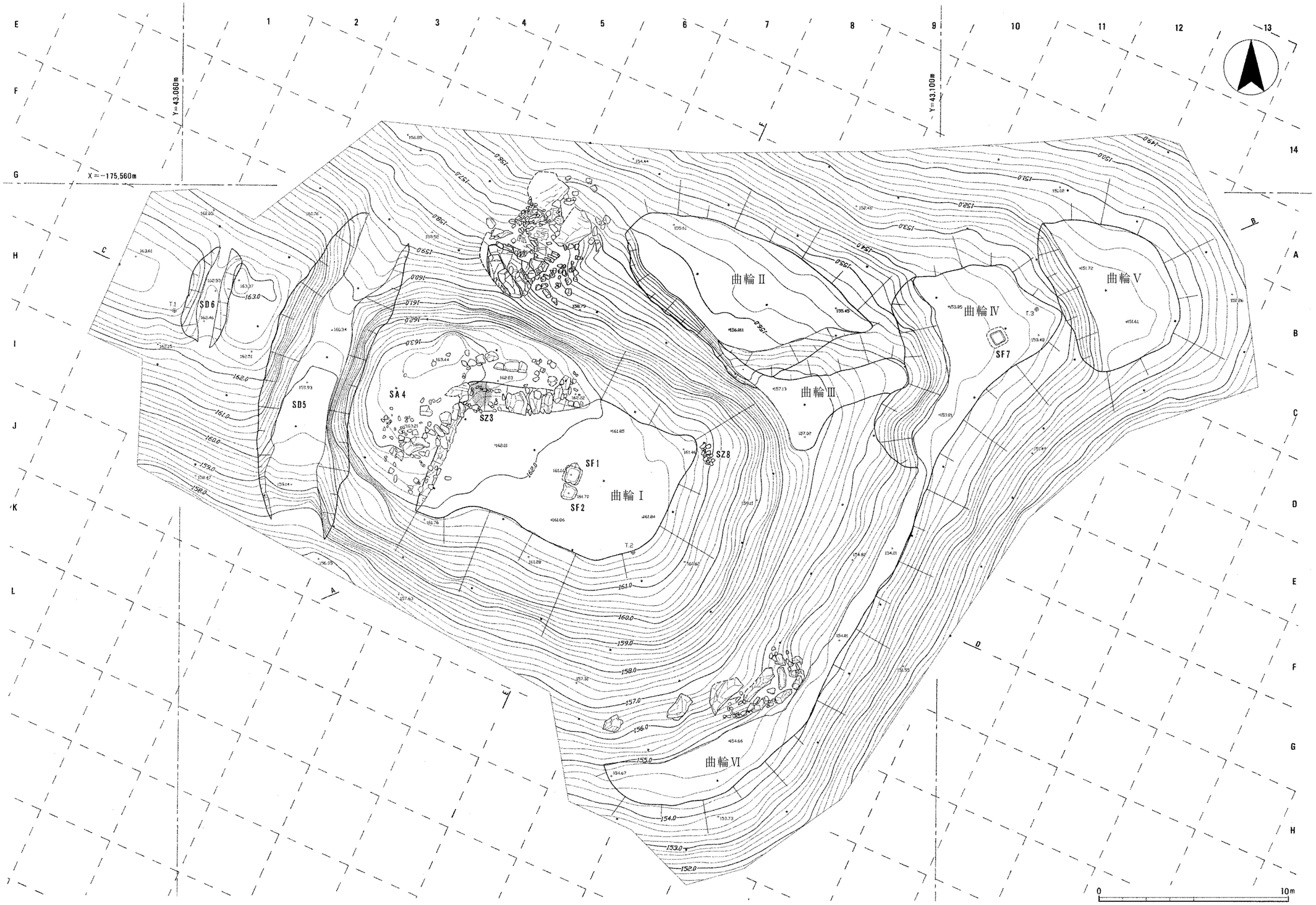
城跡は、南西に延びた尾根が南と東に分派する分岐点に１ヶ所、東に伸びる尾根に４ヶ所、南に伸びる尾根に１ヶ所に平坦面が確認でき、背後の尾根には、切通しが埋没せずに残る。虎口や、この城への登城路も現況では確認できない。

２．層序

既述したように、この山は岩山であり、地山は淡青灰色の岩盤である。この岩盤は、節理が発達しており、それに沿う方向には比較的脆く、現状においても多数のひび割れや崩壊が認められる。

築城時の造成により、基本層序を把握できる箇所は限られる。後述する曲輪Ｖの東部において旧表土を確認できた。厚さ10㎝程の旧表土層は、暗灰茶色で岩盤の崩壊により発生したと考えられる礫を多く含む。その下は、明黄褐色の混礫砂質土が20～30㎝堆積し、前述した岩盤に至る。おそらく、他の部分においても築城前は類似した状況であるものと考えられる。ただし、傾斜による流失の多寡等、場所によって各層の厚さは大きく異なり、既述したように岩盤が露呈する部分もある。

第５図　調査前測量図(1:300)



第６図　遺構平面図(1:200)

Ⅳ．遺　　構

１．構造

尾根の分岐点である最高所に最も広い曲輪Ⅰが配置される。曲輪Ⅰの北西側、後背の山地へ続く尾根には、堀切SD5を設けて分断し、城域を区画している。SD5の外側には小規模なSD6があるが、この機能は不明である。

曲輪Ⅰから東に延びる尾根上には約５ｍの段差をもって小規模な曲輪Ⅲ、さらに２ｍ下がって曲輪Ⅳ、さらに１ｍの段差で曲輪Ⅴが縦列に配置される。曲輪Ⅱは、曲輪Ⅰに次ぐ面積を占め、曲輪Ⅰより６ｍ下がった北斜面に配置される。東側に隣接する曲輪Ⅲとは、１ｍ下がった位置になる。したがって、この曲輪は麓の集落から死角の位置にあり、それを見下ろすことは不可能である。

南に延びる尾根上には曲輪Ⅰから７ｍ程も下がって、最も小規模な曲輪Ⅵが配置される。同じ高度に位置する曲輪Ⅳとの間は帯曲輪状の通路で連絡されている。

全体的には、曲輪Ⅱ～Ⅵが比較的容易に往来できるのに対し、曲輪Ⅰが最高所に孤立する状態である。また、虎口も不明である。

２．曲輪Ⅰ

最高所に位置し、面積も最大で、当城館の中心的な曲輪である。西側には土塁を配置し、土塁を除いた平坦面の広さは90㎡程で、長方形を呈する。

尾根を平坦に削平しているが、岩盤との間には厚さ20㎝ほどの整地層を設けている。この整地層は、曲輪端部では厚さ50㎝ほどになる。整地土下の岩盤には、不整形な落ち込みが散見される。それぞれの大きさが不均一で、内壁も不整形であるため、岩盤掘削時に岩塊が抜け去った後と考えられ、柱穴の可能性は無いものと考えられる。

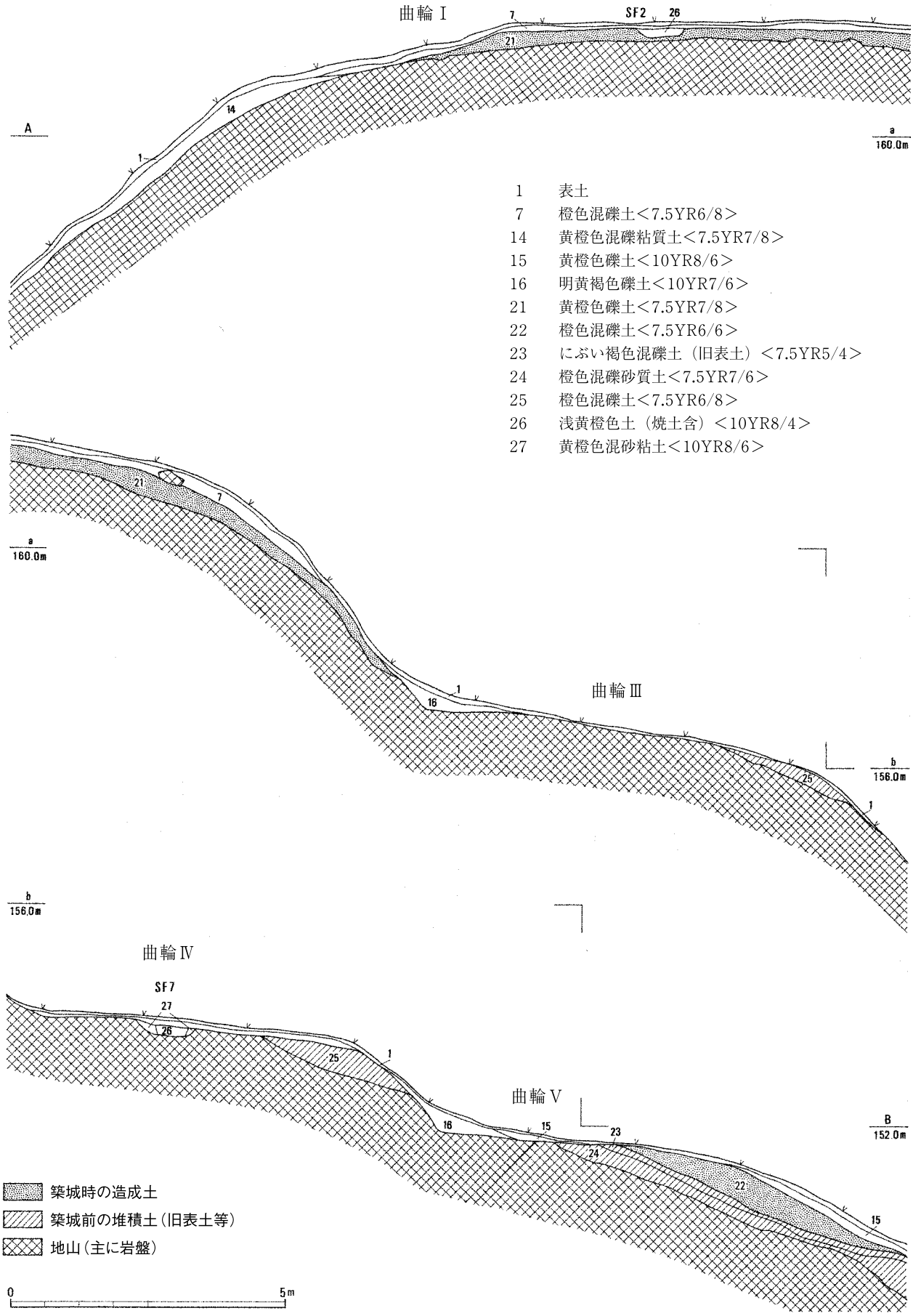
曲輪の周囲は、既述した様な急峻な斜面である。この斜面は、自然の急斜面をそのまま利用したものと考えられ、特に切岸状に加工したものとは考えられない。

曲輪内には中央部にSF1･2が配置され、７ヶ所で大小様々な楕円形の焼土が検出された他には、遺構の検出は無かった。

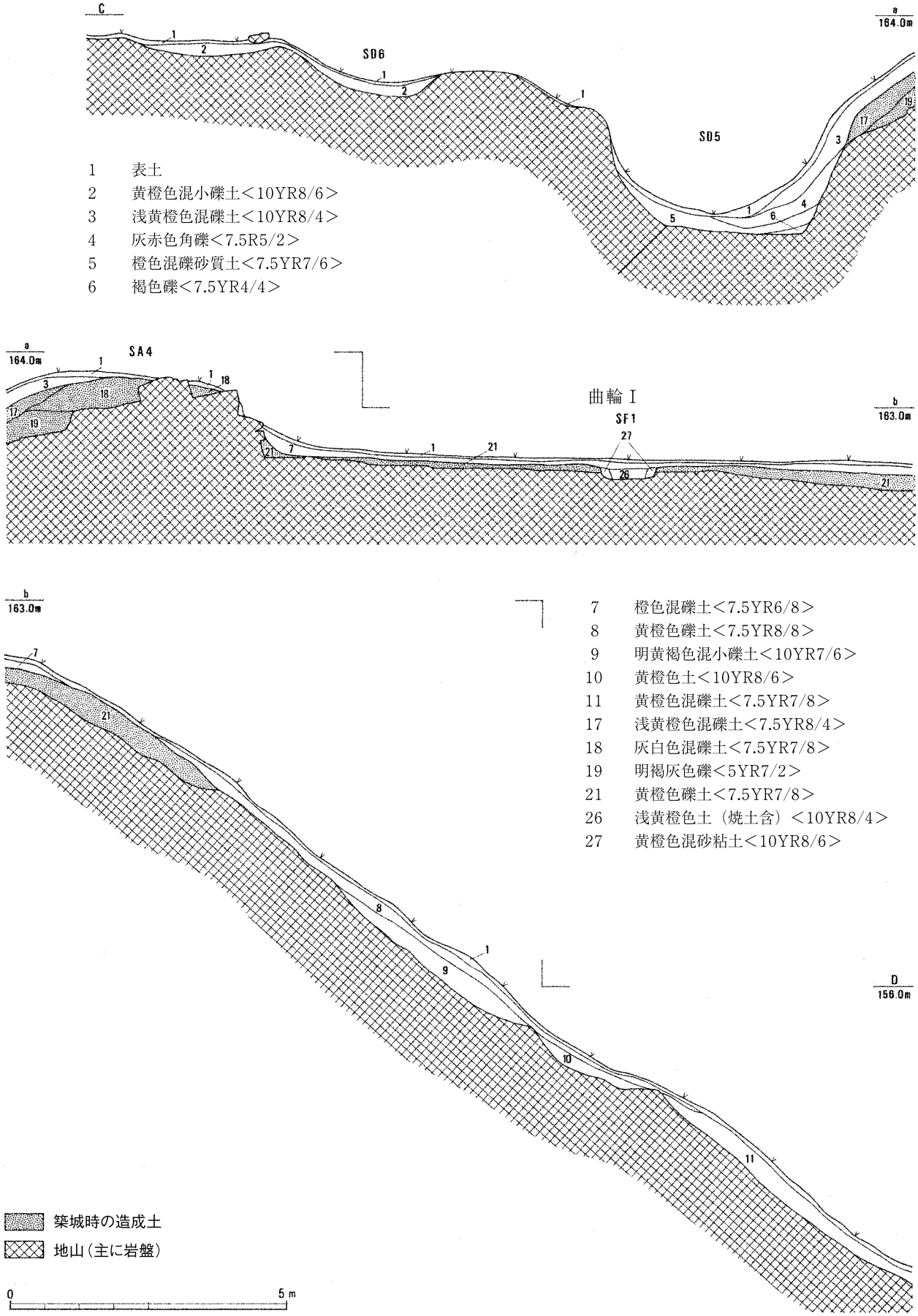
(1) 土塁

ＳＡ４（第10・11図）　曲輪Ⅰの西辺と北辺の一部を囲うＬ字状の土塁である。高さは曲輪Ⅰから１ｍ程の低いものであるが、北西側に続く堀切SD5底部までは、３ｍ以上の落差がある。幅は最大５ｍを測るが、不均一で、整形されたものではない。内側には露呈した岩盤も多く、このことから尾根を削平して曲輪Ⅰを造成する際に、この部分を削り残して成形されたものと推測できる。ただし、盛土で成形される部分も多く、後述するSZ1付近では岩盤を一度水平に削平した後に盛土し、再び高さを確保している。このような状況から、当初は全体を水平に削平する予定であったが、岩盤の掘削を余儀なくされ、途中で土塁状の高まりとして残すことに変更された可能性もある。盛土は礫を多く含み、曲輪Ⅰ削平時やSD5掘削時の残土を盛り上げたものと考えられる。

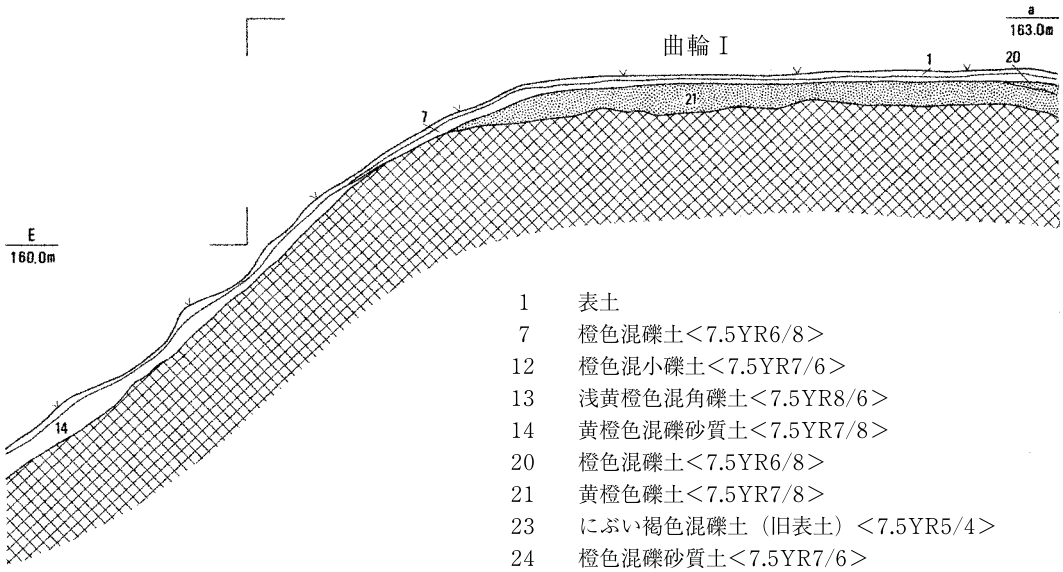
SA4の内側３ヶ所で石積が見られる。屈曲部のものは20～30㎝の方形の石を３個積み上げ、付近を小石で補強している。この方形の石は、節理に沿って割れた結果で、特に加工したものではなく、各個が不均一なものである。裏込め石はない。１列しか残存せず、横方向、高さ共に本来の規模は不明である。南部のものは、同様な石が３個、石の面を曲輪側に揃えて並べられている。本来、この上に積み上げた石があったのかどうかは不明である。やはり、裏込め石はない。また、この少し上にもSA4の傾斜に合わせて４個ほどの石が積み上げられた状態で検出されている。これらの石積には連続性や相互の関連は認められず、SA4斜面全体を化粧したものとは考えられない。SA4の盛土部分に土止めとして部分的に積まれたものと考えられる。



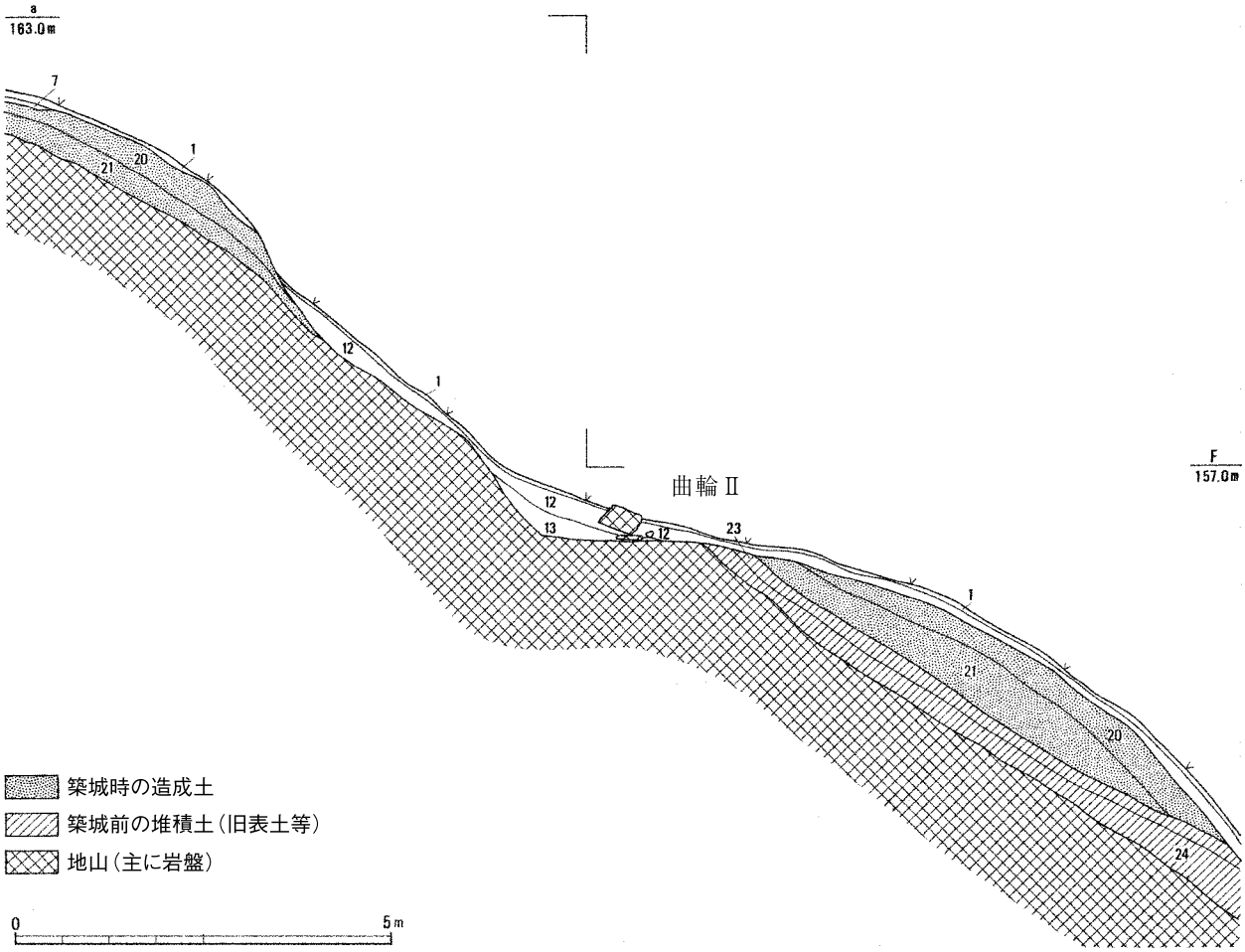
第７図　南西～北東土層断面図（1:100）



第８図　東西土層断面図（1:100）



1　表土
7　橙色混礫土<7.5YR6/8>
12　橙色混小礫土<7.5YR7/6>
13　浅黄橙色混角礫土<7.5YR8/6>
14　黄橙色混礫砂質土<7.5YR7/8>
20　橙色混礫土<7.5YR6/8>
21　黄橙色礫土<7.5YR7/8>
23　にぶい褐色混礫土（旧表土）<7.5YR5/4>
24　橙色混礫砂質土<7.5YR7/6>



第９図　南北土層断面図（1:100）

土塁上の表土直下で川原石が１個検出された。川原石は、後述するSZ8にも１個認められる。これらが何故にここにあるのかは不明である。

ＳＺ３（第11図）　SA4基底部で検出された土師器皿埋納遺構である。SA4の屈曲部で盛土によって構成される部分の基底部に位置し、曲輪Ｉからの延長上で岩盤が水平に掘削されている箇所に正立に置かれている。全て土師器皿で、大型の１はやや離れて１個体のみ、中型のものは近接して２箇所に重ねられている。それぞれ何個体ずつが重ねられていたかは、押し潰された状況から把握し難いが、接合による推測では西側に4･5･6の３個体、東側に2･3･7･13の４個体が重ねられていたことが復元できる。ただし、検出中に不慮にして取上げられたものもあり、さらに５個体程度はあったものと推測される。これらから、合計12個体を６個体ずつ２列に重ね上げたものと推測しておく。なお、大型の１は、1/2程度の残存であり、埋納とするに疑問が残るものである。

遺物の直下には、直径30㎝程度の円形の土坑が掘削されている。この土坑は岩盤を20㎝程度掘削しているが、壁は滑らかではなく、底部も不整形である。埋納位置も土坑内ではなく、検出面上であるため、これらの遺物がこの土坑に伴う確証もない。したがって、この土坑はSZ3に伴うものではなく、曲輪Ｉにみられるような岩盤掘削時に岩塊が抜け去った跡とすることも可能であろう。しかし、２基の土坑とも埋納遺物の直下に位置することは偶然と言い難い面もあり、一応、人為的なものとして報告することにした。

(2) 石積

ＳＺ８（第11図）　曲輪Ｉ東角で検出された石積である。かなり崩れた状態であるが、ちょうど大木の根に覆われていたために崩落を免れたものである。長さ１ｍほど残存し、15～20㎝ほどの自然石を３段に積み上げる。石は、人為的関与の程度は不明であるが、節理に沿って岩盤が割れたもので、裏込め石は無い。斜面下方で転石がほとんど検出されないことから、このSZ8は曲輪Ｉ斜面全体を覆っていたものとは到底考えられない。曲輪Ｉ縁辺と斜面の境界に３段程度に巡らしていた可能性も皆無ではないが、等高線が示すように曲輪Ｉ東隅は整地土の流失が激しく、これを防ぐためにこの部分にのみ設けられた可能性が強いものと考える。

(3) 焼土・焼土坑

曲輪Ｉでは、随所から焼土が検出された。直径20～70㎝の楕円形状に焼けた地点が７ヶ所で確認されたが、これらに特定の傾向は見出せない。また、曲輪中央には焼土坑も検出されている。

ＳＦ１（第12図）　曲輪Ｉ中央部で検出した。一辺約70㎝の正方形を呈する土坑である。深さは約20㎝で底部は平坦である。この土坑は、一辺90㎝の一回り大きい土坑を掘削し、黄橙色やにぶい黄橙色の粘土を貼り付けて成形されている。この粘土は砂を多く含み、極めて締まりが強い状態である。底部は岩盤に達しているためか、この粘土は貼り付けられていない。土坑壁は厚さ１㎝程度焼けているが、底部には及ばない。埋土には、焼土片を含むが、炭は若干混入する程度である。

ＳＦ２（第12図）　SF1の南側に接するように位置する土坑である。一辺約70㎝の不整方形を呈するが、SF1と方向を揃え、規模も似る。埋土もSF1と同様な状態で、15㎝程度の大きな焼土塊も含まれる。しかし、土坑壁は焼けておらず、底部も中央部がやや窪み平坦でない。深さも約10㎝程度で、SF1でみられるような粘土状の土は貼り付けられていない。

(4) 堀

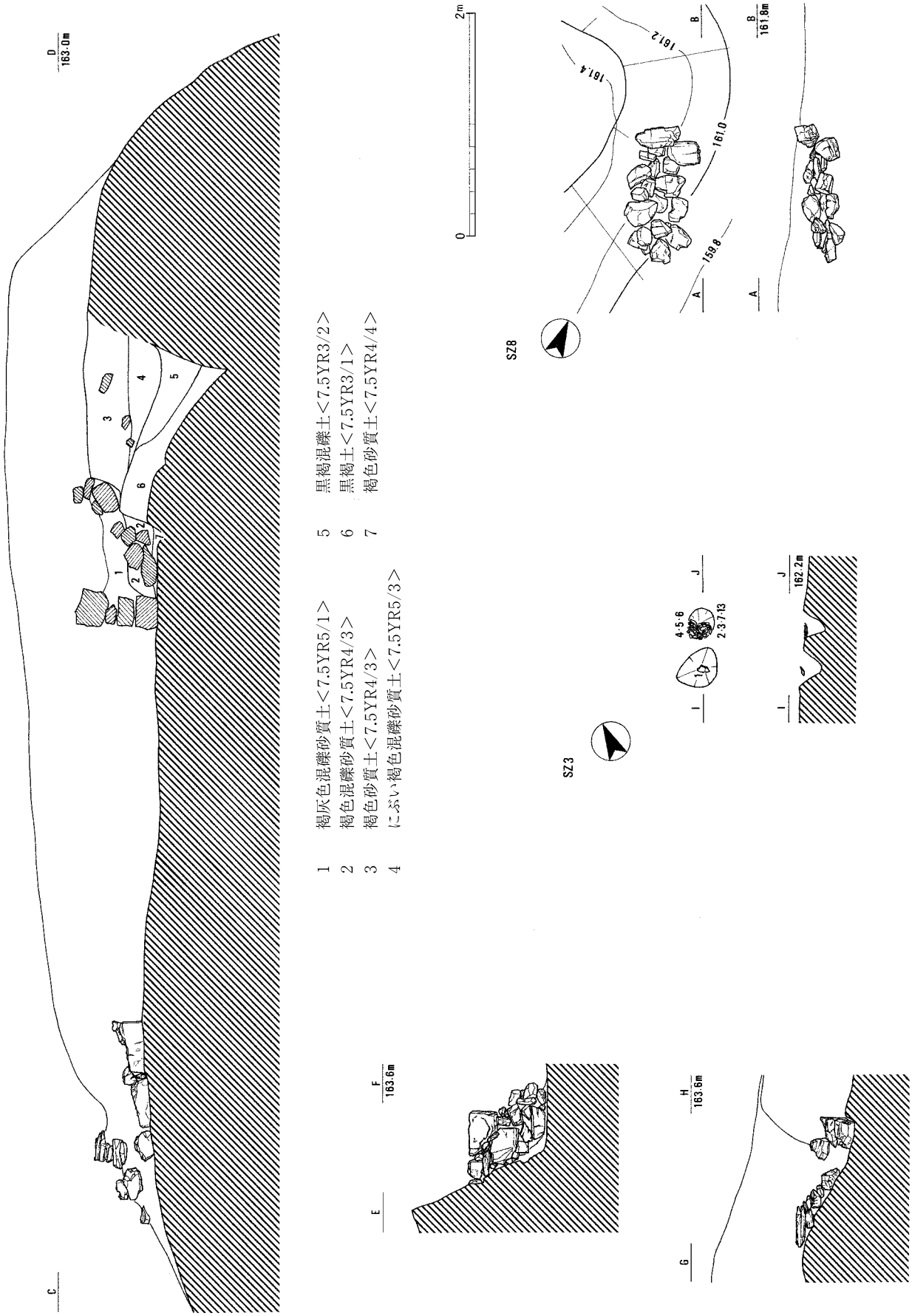
ＳＤ５　　北西につながる尾根から城内への侵入を防ぐ機能をもつ堀切である。幅は上端で５ｍ、堀底では２～３ｍで一定の幅を保っており、「箱掘り」と称される形態である。深さは、尾根頂部から2.2ｍ、東に接するSA4最高部からでは３ｍの深さをもつ。

現況においても埋没することなく、粟生城跡発見の契機になったものであるが、調査の結果、30㎝ほど黄褐色の混礫土が堆積していた。また、東側ではSA4からの崩落土の堆積が厚さ50㎝ほど認められる。

平面形は、尾根に対して直角に掘削されるが、やや曲輪Ｉ側に回り込むような状態を示す。

SD5の北側への延長上には、破砕され岩盤が50㎝以上の厚さに堆積している。おそらく、SD5掘削の際のものと推測される。旧地形では、SD5の延長上に弱い谷状地形があり、これを掘削残土で埋めるかたちとなっている。このことから、SD5の掘削位置

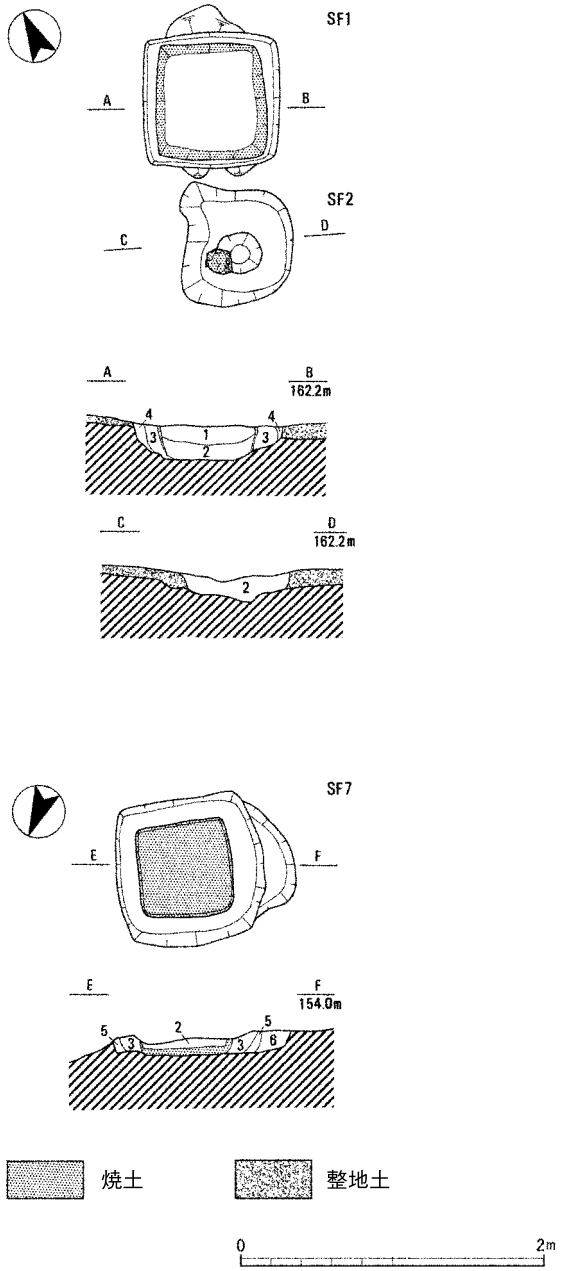
第10図　曲輪Ⅰ平面図(1:100)



第11図　SA4断面、SZ3・8実測図(1:50)

は、元来、鞍状を呈していた可能性がある。言い換えれば、尾根上のやや鞍状を呈する地点を選んで、ＳＤ５を掘削したものと考えられる。

ＳＤ６　SD5から3m外側に掘削されたものである。幅２ｍ、深さは尾根頂部から60㎝未満で、堀とするには小規模なものである。岩盤を明確に掘削しているため、人為的なものには相違ないが、この城館において、いかなる機能を果たしていたのかを推測することは困難である。当初、堀切として掘削され始めたものが、何らかの理由でSD5に変更されたものか、SD5の外側にさらに堀切を設ける計画が途中で放棄されたものと推測せざるを得ない。



1　にぶい黄橙（10YR6/3）
2　浅黄橙（10YR8/4）＜焼土含＞
3　黄橙（10YR8/6）＜砂を含む粘土＞
4　にぶい黄橙（10YR7/4）＜粘土＞
5　にぶい黄橙（10YR7/2）
6　灰褐（7.5YR6/2）＜岩盤粉砕礫多含＞

第12図　SF1・2・7実測図（1:50）

３．曲輪Ⅱ

曲輪Ⅰの北側に６ｍほど下がって位置する。不整菱形を呈し、面積は45㎡で、曲輪Ⅰの半分程度であるものの、２番目に広い曲輪である。他の曲輪が全て、眼下の盆地を見下ろせるのに対し、曲輪Ⅱのみは、尾根頂部から山側の斜面に位置し、盆地からは完全な死角となる位置である。

約35°以上の傾斜をもつ曲輪Ⅰからの斜面の下側２ｍを掘削し、北側の谷を埋める造成を行っている。斜面上部については、自然の傾斜にちかい状態で、掘削土量は少ないことが曲輪Ⅱ下部に残る自然地層傾斜角度から想定される。北側の整地層は厚さ80㎝ほどを測るが、曲輪Ⅱ北端と斜面との境界が緩慢であることから、整地土が相当流失していることが推測され、本来はもう少し広い面積を保有していたものと推測される。

東側に細長い曲輪Ⅲが最高１ｍの高さで接する。西側には露呈した岩盤があたかも土塁状に延び、南側の曲輪Ⅰとの斜面をあわせ、結果的に３方を遮蔽される機密性の高い曲輪である。唯一開口する北側の斜面は、他の斜面と比べ傾斜が緩やかで、防御の点においては弱点となり得る。

４．曲輪Ⅲ

曲輪Ⅰから東に延びる尾根上に位置し、削り出しにより成形されたものである。曲輪Ⅰから４ｍほど下がった位置に幅２ｍ、長さ7.5mの長方形を呈し、面積は15㎡ほどの小規模なものである。このことから曲輪とするに疑問も残り、既述したように曲輪Ⅱを遮蔽する土塁としての機能を期待するものと考えられる。

５．曲輪Ⅳ

曲輪Ⅲから２ｍの段差を下がった地点に位置する。一辺６ｍの不整方形を呈し、面積は30㎡程度、中央部に焼土坑SF7を配置する。

曲輪Ⅲ側の岩盤を掘削し、曲輪Ⅴ側では厚さ50㎝以上の盛土によって平坦面を確保している。したがって、西側は曲輪Ⅲへ２ｍの段差、東側は１ｍの落差で曲輪Ⅴ、南側（盆地側）は急斜面で区画されるが、北側は曲輪Ⅱと同様、比較的緩斜面である。

ＳＦ７（第12図）　曲輪Ⅳの中央部で検出した。一辺約60㎝の正方形を呈する土坑である。深さは約10㎝で底部は平坦である。この土坑は、露呈した岩盤を一辺１ｍの正方形に掘削し、SF1と同様な粘土を貼り付けて成形している。土坑壁や底部は厚さ５㎝ほどよく焼けている。埋土には焼土片を含むが、炭は若干混入する程度である。このように、SF1とよく似た形状であるが、粘土の貼り付けが、底部に及んでいることや、底部までよく焼けていること等、若干の相違点もある。

６．曲輪Ⅴ

粟生城跡において最も低い位置にある。曲輪Ⅳと同様に、高い曲輪Ⅳ側を掘削し、３方へ整地土を広げている。西側は、曲輪Ⅳから１ｍの落差をもち、南側（盆地側）は急斜面であるが、東から北側にかけては比較的緩い斜面である。特に東へ延びる尾根との境界は緩慢で、この尾根自体の傾斜も緩やかである。この尾根は約100ｍほど先で急斜面にて谷に落ち込んでいるが、それまでに堀切等の防御施設はなく、東側の防御は特に甘いものとせざるを得ない。

７．曲輪Ⅵ

唯一、南に延びる尾根に設定された曲輪である。北に接する曲輪Ⅰからは７ｍの落差があり、東西は急斜面である。南へは、比較的緩い傾斜の尾根が続くが、50ｍほど先で盆地に向かって急落する。尾根の曲輪Ⅰ側を掘削し、低い方向（盆地側）へ盛土を行い、幅３ｍの平坦面を確保している。曲輪Ⅰ側に露呈する岩盤に阻まれ、大規模な掘削が困難であったことが推測される。そのために、面積は15㎡程度の小規模なものにならざるを得なかったのかも知れない。

この曲輪Ⅵから曲輪Ⅳへ帯曲輪状の通路がある。斜面を掘削し、幅70㎝を確保している。これにより南側へ延びる尾根に孤立する曲輪Ⅵが他の曲輪と連絡される。

V．遺　　物

1．ＳＺ３出土遺物

既述した出土状況から、一括性は高いものと考えられ、全て土師器の皿である。１は、口径15㎝の大型のもので、半球形にちかい形状であるが、薄い器壁と強い指押えのため全体的にはかなり歪んだものである。２～13は口径９～10㎝前後の中型のもので、全て内弯する口縁部である。小型で扁平な皿は出土していない。

2．包含層・表土他出土遺物

(1) 土師器

皿、鍋、羽釜があり、出土遺物の主体を成す。南伊勢から志摩方面で普遍的に出土するものと同様な器形であるが、54は異質である。

皿　口径７～7.8㎝の小型で扁平なもの（14～34）と8.1～10.3㎝の中型のもの（35～42）がある。小型のものには、器高が１㎝を超えるもの（14・15・19・20）から0.5㎝以下のほとんど扁平なもの（28～31・33・34）まで多様であるが、雑な口縁部の立ち上げによる歪みのためで、器高差に意味はないものと考えられる。ただし、14は整った成形で古相を示すものとしてよいであろう。

中型のものは内弯する口縁部をもち、器高2.5㎝前後であるが、口径はやや不揃いである。

鍋　全て口縁端部を内側に折り返すが、折り返しの小さいもの（43～47）とおおきく折り返し、その内側を強くヨコナデするもの（48～53）がある。前者は、口径19㎝の小型のもの（46）と、口径22～23㎝の中型のものがあり、後者は、口径19㎝の小型のもの（50）、24㎝の中型のもの（48・49）、28～34㎝程度の大型のもの（51～53）の３種に分けられる。両者とも同様な調整ではあるが、47のハケメは確認できない。大型のものには頸部内面に指押列が顕著であり、外面のハケメも頸部屈曲部までは及んでいない。また、胎土は他のものよりやや粗い。

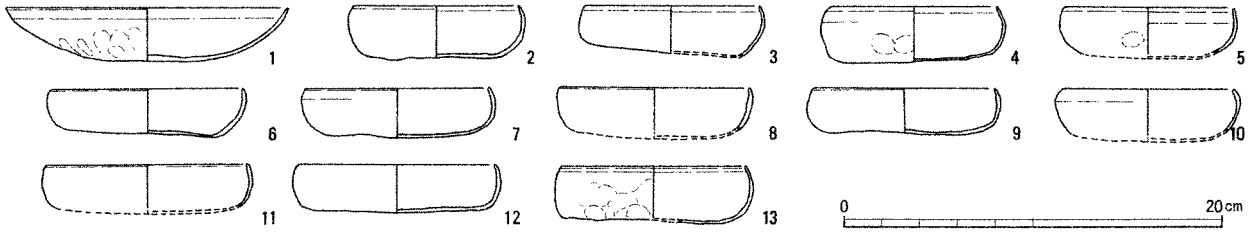
これらのほとんどには外面に煤が付着し、実際に煮炊に使用されたことが窺える。53は、曲輪Ｉの北東側斜面と東南側斜面で出土したものが接合している。

羽釜　口径20㎝の小型のもの（54）と38㎝の大型のもの（55）がある。55は、鍔以下が接合していないが、同一個体と判断して合成して図化したものである。54は口縁部直下にやや上向きの小さい鍔を付けるのに対し、55は口縁端部からやや下がって水平に付けられており、両者の形態はおおきく異なる。54の鍔は形骸化したもので、羽釜としての機能は果たせず、蓋受けや把手として機能したものかもしれない。54は、曲輪Ⅱと曲輪Ⅲ間の斜面からの出土のものと曲輪Ｉ南東側斜面で出土したものが接合している。

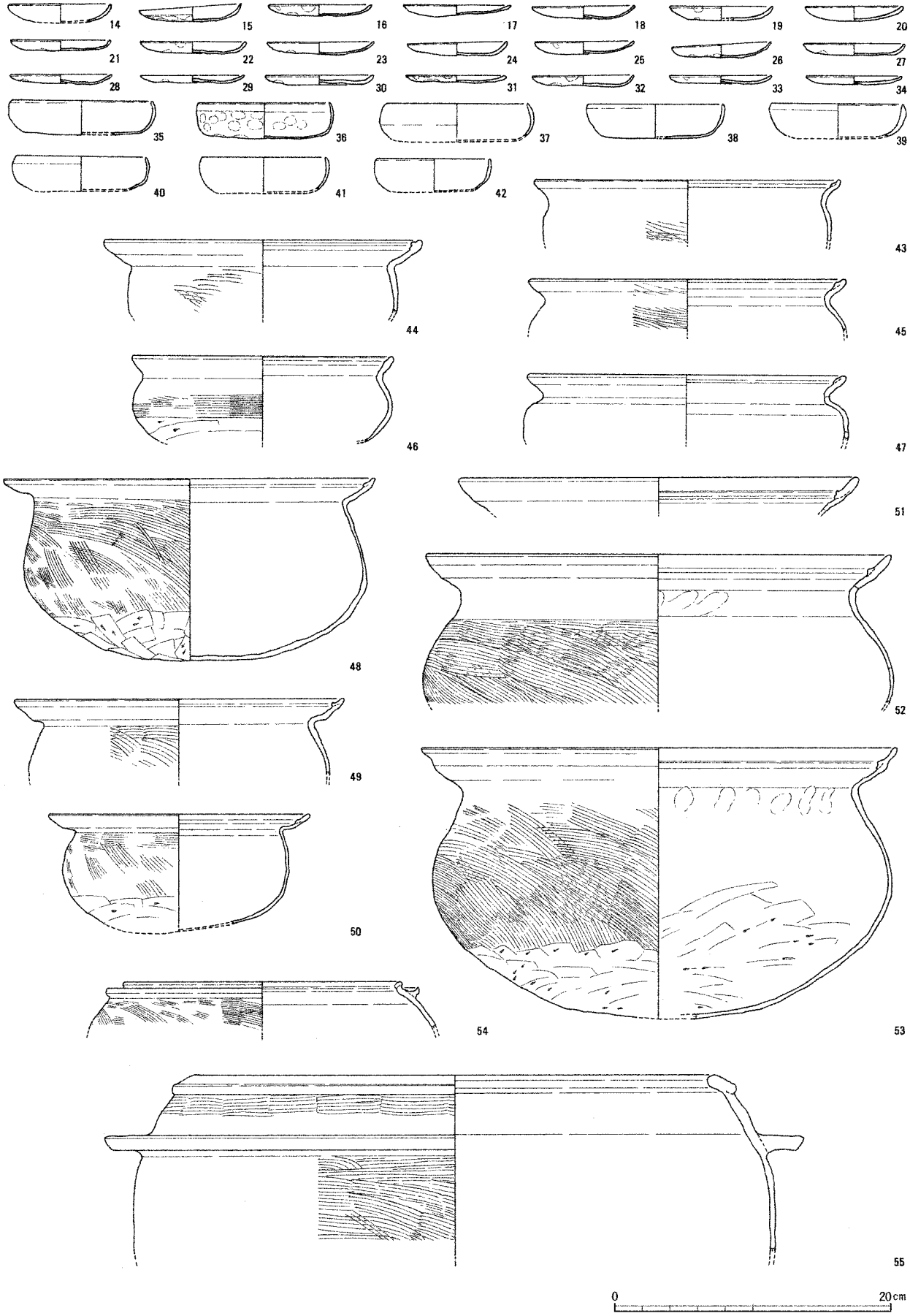
(2) 陶器

比較的多くの陶器が出土している。87・88が常滑製品である他は、瀬戸製品と思われる。ただし、68は薄手で、胎土が硬質であり、中国産の可能性が考えられる。

椀　56は小天目、57～68は天目茶椀、69は鉄釉



第13図　SZ3出土遺物実測図（1:4）



第14図　遺物実測図(1:4)

の平椀、70～74は灰釉平椀、75は平底末広椀である。56・69の施釉や調整等の技法は、天目茶椀と同一である。60は、曲輪Ⅱと曲輪Ⅲ間の斜面からの出土のものと曲輪Ⅰ南東側斜面で出土したものが接合している。また、73は、曲輪Ⅰの北東側斜面と南東側斜面で出土したものが接合している。

天目茶椀は、半球形の体部をもつものが多いが、66・67は、直線状に立ち上がる体部から屈曲する口縁部をもつものである。57・58は、口縁端部の外反がほとんど無く、57は他のものよりやや厚手である。高台周辺は露胎のものが多いが、64・66・67には錆釉が施される。高台の形態を確認できるものは少ないが、全て体部下半からのロクロケズリにより削り出されたもので、輪高台のもの（60・62）と内反り高台もの（64）がある。いずれも削り込みは浅い。58・62の内面には茶筅の痕跡[①]と思われる使用痕がある。

灰釉平椀も高台の形態を確認できるものは少ないが、全て体部下半からのロクロケズリにより削り出されたものと考えられ、73・74では高台脇の削り込みが浅いことが判る。また、73・74にはトチンの痕跡が残る。

壺　76のみである。茶入としたが、確証はない。合子かもしれない。

皿　77・78は縁釉小皿、84・85は直縁大皿である。縁釉小皿は、口径12㎝程度のやや大型のものであるが、底部内面も露胎のままである。85は底部内面まで施釉され、内面に重ね焼の痕跡が残る。

花瓶　79のみである。肩部周辺のみの残存であるが、尊式花瓶と考えられる。体部に頸部を接合して形成している。

香炉　80のみで袴腰形香炉である。底部は、糸切未調整のままで、形骸化した脚を貼り付け、３足とする。

鉢　81・82は小鉢、83は小鉢の底部と考えられる。施釉は、口縁端部のみに灰釉が施されているが、82は極めて薄く、素地の色調が残る。

86は、図示していないが片口がつくものと思われ片口鉢と考えられる。体部外面下半をロクロケズリした後、不整形にヘラケズリする。

甕　87、88共に小型の甕である。88は外面を板状工具でナデ上げる。

(3) 青磁

３～４個体分の破片があるが、89のみを図示した。盤とするが、口径が小さく小鉢とすべきかもしれない。外面に連弁文を陰刻する。

(4) 瓦質火舎

90のみである。４片の小片を図上で合成したもので、器形の復元は、推測による。さらに、４片が別個体の可能性も残る。

口縁部と体部の境に凸帯を１条、体部上半に２条１組の凸帯を巡らす。凸帯は体部に沈線を施した後、粘土紐を充填して成形している。この凸帯間と口縁部外面には、雷文を押捺する。また、肩部には梅花状の透孔を穿つ。

(5) 石製品

91のみで、石鍋片である。口縁部片の一方は破砕面のままであるのに対し、他方は、鋭利な工具により切断されている。口縁部には、他にも切断を試みた痕跡が認められる。鍔も人為的に削り取られている。大きさや、鍔を削り取り扁平にしていることから温石としての転用を試みたものと考えられる。ただし、類例[②]によると方形に加工され、１ヶ所に孔を穿つのが一般的である。91は不整形であり、穿孔も無いため、温石への転用には疑問も残る。未製品あるいは他のものへの転用の可能性もある。

(6) 金属製品

92のキセルと鉄銭がある。

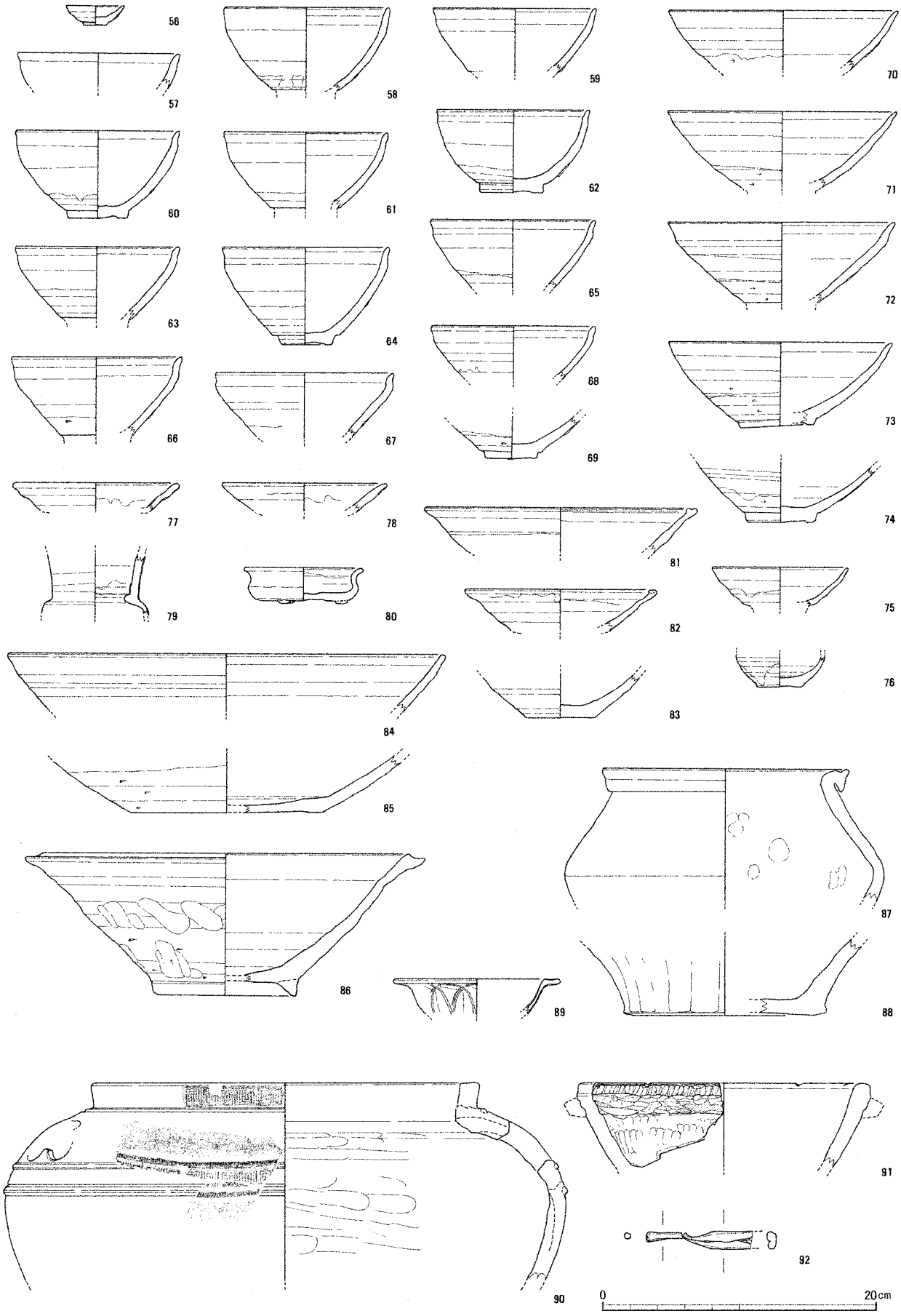
92は、城に伴うものかどうかは不明であるが、表土下の包含層からの出土であるため、一応取り扱う。吸口部分で、潰れた状態のために口径は推測であるが、吸口で0.5㎝、その他では１㎝程度である。内面には植物繊維状の物質が巻き込まれたように残存する。

鉄銭（ＰＬ32）は、錆が激しく詳細は不明であり、表土からの出土のため、城に伴う確証もない。

[註]

① 藤澤良祐氏の御教示による。

② 鈴木康之　『草土千軒町遺跡出土の滑石製石鍋』　広島県立歴史博物館　1998



第15図　遺物実測図(1:4)

番号	実測番号	遺構	出土位置	取上げNo	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
1	7-1	SZ3	G-6 SA4内	207·211	土師器Ⅲ	15.0	3.0		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	0.5㎜の砂粒含	良	3/4残	
2	7-6	SZ3	G-6 SA4内	206·208 209	土師器Ⅲ	8.8	2.9		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	0.5㎜の砂粒含	良	3/4残	歪みが激しい。
3	7-5	SZ3	G-6 SA4内	206·208 209·211	土師器Ⅲ	9.2	2.5		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.5㎜の砂粒含	良	口縁部完存 底部欠損	歪みが激しい。
4	7-3	SZ3	G-6 SA4内	206·208	土師器Ⅲ	8.7	3.0		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(2.5Y6/4)	0.5㎜の砂粒含	良	2/3残	歪みが激しい。
5	7-2	SZ3	G-6 SA4内	206·208	土師器Ⅲ	9.0	2.8		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	1㎜の砂粒含	良	1/2残	
6	8-4	SZ3	G-6 SA4内	206·208	土師器Ⅲ	10.1	2.4		外面未調整、内面ナデ	外:明黄褐(10YR7/6) 内:明黄褐(10YR6/6)	1.5㎜の砂粒含	良	口縁部5/6残	
7	8-1	SZ3	G-6 SA4内	208·209	土師器Ⅲ	9.6	2.6		外面未調整、内面ナデ	明黄褐(10YR7/6)	1㎜の砂粒含	良	ほぼ完形	
8	8-6	SZ3	G-6 SA4内	206	土師器Ⅲ	10.0	2.7		外面未調整、内面ナデ	浅黄(2.5Y7/4)	1.5㎜の砂粒含	良	口縁部1/3残	
9	8-2	SZ3	G-6 SA4内	206	土師器Ⅲ	9.6	2.4		外面未調整、内面ナデ	外:明黄褐(10YR6/6) 内:にぶい黄橙(10YR6/4)	1~2㎜の砂粒含	良	口縁部3/4残	
10	8-7	SZ3	G-6 SA4内	209·211	土師器Ⅲ	9.0	2.8		外面未調整、内面ナデ	明黄褐(10YR7/6)	1㎜の砂粒含	良	口縁部1/3残	
11	8-5	SZ3	G-6 SA4内	205	土師器Ⅲ	10.6	2.7		外面未調整、内面ナデ	外:浅黄(2.5Y7/4) 内:にぶい黄(2.5Y6/4)	1㎜の砂粒若干含	良	口縁部3/4残	
12	8-3	SZ3	G-6 SA4内	206·211	土師器Ⅲ	10.4	2.6		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	1㎜の砂粒若干含	良	口縁部1/2残	
13	7-4	SZ3	G-6 SA4内	206·208 209	土師器Ⅲ	9.8	2.8		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.5㎜の砂粒含	良	3/4残	
14	16-2	—	表採	164	土師器Ⅲ	7.4	1.4		外面未調整、内面ナデ	明黄褐(10YR7/6)	1.5㎜の砂粒含	不良	1/2残	
15	3-2	—	F-7 包含層	77	土師器Ⅲ	7.5	1.1		外面一部ナデ、他は未調整、内面ナデ	浅黄(2.5Y7/4)～(2.5Y8/4)	精良	良	完形	歪みが激しい。
16	15-9	—	F-7 包含層	77	土師器Ⅲ	7.4	0.8		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	0.5㎜の砂粒含	良	口縁部5/6残	
17	15-13	—	F-7 包含層	77	土師器Ⅲ	7.8	0.8		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.5㎜の砂粒若干含	良	口縁部2/3残	
18	15-10	—	F-7 包含層	77	土師器Ⅲ	7.4	0.8		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	1㎜の砂粒含	良	口縁部3/4残	
19	15-7	—	F-7 包含層	77·78	土師器Ⅲ	7.4	1.1		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.5㎜の砂粒含	良	口縁部5/6残	
20	16-5	—	H-6 包含層	65	土師器Ⅲ	7.1	1.1		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	1～1.5㎜の砂粒含	良	口縁部2/3残	
21	15-3	—	F-7 包含層	78	土師器Ⅲ	7.3	0.8		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	0.5㎜の砂粒含	良	口縁部2/3残	
22	15-8	—	F-7 包含層	77·78	土師器Ⅲ	7.6	0.8		外面未調整、内面ナデ	明黄褐(10YR7/6)	1㎜の砂粒含	良	口縁部7/8残	
23	15-12	—	F-7 包含層	77	土師器Ⅲ	7.6	0.9		外面未調整、内面ナデ	明黄褐(10YR7/6)	0.5㎜の砂粒若干含	良	口縁部2/3残	
24	15-2	—	F-7 包含層	78	土師器Ⅲ	7.3	0.9		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	1~2㎜の砂粒含	良	口縁部5/6残	
25	15-11	—	F-7 包含層	77	土師器Ⅲ	7.1	0.8		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	1㎜の砂粒含	良	口縁部7/8残	
26	15-15	—	F-7 包含層	77·78	土師器Ⅲ	7.2	1.0		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	微砂若干含	良	口縁部1/2残	
27	16-4	—	G-7 表土直下	41	土師器Ⅲ	7.3	0.9		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.5㎜の砂粒含	良	口縁部3/4残	
28	16-3	—	E-9 曲輪Ⅱ直上	123	土師器Ⅲ	7.4	0.5		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	2.5㎜の小石含	良	口縁部5/6残	
29	15-14	—	F-7 包含層	77	土師器Ⅲ	7.5	0.5		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	0.5～4㎜の砂粒含	良	口縁部2/3残	
30	15-6	—	F-7 包含層	78	土師器Ⅲ	7.8	0.5		外面未調整、内面ナデ	明黄褐(10YR7/6)	1.5～2㎜の砂粒含	良	口縁部5/6残	
31	15-5	—	F-7 包含層	78	土師器Ⅲ	7.3	0.5		外面未調整、内面ナデ	明黄褐(10YR7/6)	1㎜の砂粒含	良	ほぼ完形	
32	15-1	—	F-7 包含層	78	土師器Ⅲ	7.4	0.7		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	1㎜の砂粒含	良	口縁部9/10残	
33	15-4	—	F-7 包含層	78	土師器Ⅲ	7.4	0.4		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	微砂含	良	口縁部1/2残	
34	16-1	—	F-7 包含層	77	土師器Ⅲ	7.0	0.5		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	1.5㎜の砂粒含	良	口縁部1/4残	
35	16-7	—	H-11 包含層	182	土師器Ⅲ	10.0	2.5		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	微砂若干含	良	口縁部1/4残	
36	5-3	—	F-7 包含層	77	土師器Ⅲ	9.6	2.6		外面未調整、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	1㎜の砂粒含	やや不良	口縁部1/2残	
37	12-5	—	H-11 包含層	87	土師器Ⅲ	10.3	2.8		外面未調整、内面ナデ	淡黄(2.5Y8/3)	精良	良	口縁部1/4残	
38	16-8	—	I-11 包含層	183	土師器Ⅲ	9.7	2.5		外面未調整、内面ナデ	明黄褐(10YR7/6)	1㎜の砂粒含	良	口縁部1/2残	
39	12-7	—	H-11 包含層	87	土師器Ⅲ	9.6	2.5		外面未調整、内面ナデ	淡黄(2.5Y8/3)	精良	良	口縁部1/5残	
40	12-4	—	I-10 包含層	80	土師器Ⅲ	9.4	2.5		外面未調整、内面ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	精良	良	口縁部1/6残	
41	16-6	—	F-7 包含層	78	土師器Ⅲ	8.9	2.6		外面未調整、内面ナデ	明黄褐(10YR7/6)	0.5㎜の砂粒含	良	口縁部1/3残	
42	12-6	—	H-11 包含層	87	土師器Ⅲ	8.1	2.4		外面未調整、内面ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	2㎜の小石含	良	口縁部1/4残	
43	12-1	—	E-9 曲輪Ⅱ直上	110	土師器鍋	22.1	—		外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	精良	やや不良	口縁部1/8残	外面に煤付着。
44	1-4	—	B-10 表土直下	13·19	土師器鍋	23.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄(2.5Y6/3)	3㎜の砂粒含	良	口縁部1/8残	
45	12-3	—	E-8 曲輪Ⅱ直上	97	土師器鍋	22.8	—		外面ハケメ、内面ナデ	淡黄(2.5Y8/3)	1.5㎜の砂粒含	やや不良	口縁部1/14残	外面に煤付着。
46	10-2	—	E-8 曲輪Ⅱ直上	96·97	土師器鍋	19.0	—		外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	2㎜の砂粒含	不良	口縁部1/2残	外面に煤付着。
47	12-2	—	K-9 曲輪Ⅵ直上	147	土師器鍋	22.8	—		ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	精良	やや不良	口縁部1/8残	外面に煤付着。
48	9-1	—	E-9 包含層	94	土師器鍋	26.9	13.3		外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	1㎜の砂粒含	良	2/3残	外面に煤付着。

第２－１表　遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	取上げNo	器種器形	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
49	10-4	—	A-12 包含層	128	土師器鍋	24.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	浅黄(2.5Y7/4)	0.5㎜の砂粒含	良	口縁部1/3残	外面に煤付着。
50	10-3	—	H-11 東斜面犬走り	108	土師器鍋	19.0	8.7		外面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.5㎜の砂粒含	やや不良	口縁部1/4残	外面に煤付着。
51	13-3	—	E-6 包含層	92	土師器鍋	28.9	—		—	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:灰 白(10YR8/2)	2㎜の小石多含	良	口縁部1/6残	外面に煤付着。
52	13-2	—	E-6 包含層	92	土師器鍋	33.8	—		外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	2㎜の小石多含	良	口縁部1/6残	
53	2-1	—	F-7、G-10 包含層	78・105	土師器鍋	34.6	19.8		上半外面ハケメ、内面ナデ、下半内外面ヘラケズリ	にぶい黄橙(10YR6/4)	2㎜の小石多含	良	ほぼ完形	外面に煤付着。
54	10-1	—	E-9 表土直下	6・14・86	土師器羽釜	20.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.5㎜の砂粒含	不良	口縁部2/3残	外面に煤付着。
55	11-1	—	F-7 包含層	77・78・84	土師器羽釜	38.0	—		外面ハケメ、内面ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	2㎜の小石多含	やや不良	口縁部1/4残	
56	5-2	—	J-12 包含層	106	陶器小天目	4.3	1.4	高台径1.7	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:黒褐(7.5YR3/1) 素地:灰白(2.5Y8/2)	0.5㎜の砂粒含	良	完形	鉄釉。
57	19-1	—	D-12 表採	160	陶器天目茶碗	12.0	—		ロクロナデ	釉:黒褐(7.5YR3/1)	精良	良	口縁部1/12残	鉄釉。
58	5-5	—	B-12 包含層	70	陶器天目茶碗	12.0	—		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:黒(10YR2/1) 素地:浅黄(2.5Y7/4)	0.5㎜の砂粒含	良	口縁部1/4残	鉄釉。内面に使用痕。
59	19-3	—	H-7 SF2	161	陶器天目茶碗	12.0	—		ロクロナデ	釉:暗褐(10YR3/3) 素地:浅黄橙(10YR8/3)	精良	良	口縁部1/6残	鉄釉。
60	1-3	—	H-10 包含層	9・12・57	陶器天目茶碗	12.0	6.5	高台径4.5	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:オリーブ黒(5Y2/2) 素地:灰白(2.5Y8/2)	精良	良	1/4残	鉄釉。
61	6-5	—	H-6 曲輪Ⅰ・Ⅱ直上	125・132 136	陶器天目茶碗	12.0	—		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:灰褐(5Y4/2) 素地:浅黄(2.5Y7/3)	精良	良	口縁部1/2残	鉄釉。
62	5-1	—	E-9 曲輪Ⅱ直上	114	陶器天目茶碗	11.3	6.2	高台径4.5	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:黒(7.5YR2/1) 素地:淡黄(2.5Y8/3)	0.5㎜の砂粒含	良	ほぼ完形	鉄釉。口縁部を漆により補修。内面に使用痕。
63	6-3	—	I-13 包含層	197	陶器天目茶碗	12.0	—		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:黒(7.5YR2/1) 素地:灰黄(2.5Y6/2)	0.5㎜の砂粒含	良	口縁部1/6残	鉄釉。
64	5-4	—	F-9 曲輪Ⅱ直上	95・124	陶器天目茶碗	12.1	7.1	高台径3.4	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:にぶい褐(7.5YR5/3)	0.5㎜の砂粒含	良	底部完存 口縁部1/2残	鉄釉。体部下半外面錆釉。
65	6-1	—	H-12 表土直下	2	陶器天目茶碗	12.1	—		ロクロナデ	釉:黒(7.5YR2/1) 素地:灰黄(2.5Y7/2)	0.5㎜の砂粒含	良	口縁部1/4残	鉄釉。
66	6-4	—	E-8 曲輪Ⅱ直上	113	陶器天目茶碗	12.4	—		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:黒(7.5YR2/1) 素地:褐灰(10YR5/1)	精良	良	口縁部1/4残	鉄釉。体部下半外面錆釉。
67	1-5	—	F-7 表土 直下	3	陶器天目茶碗	13.0	—		ロクロナデ	釉:暗褐(7.5YR3/4)	精良	良	口縁部1/6残	鉄釉。体部下半外面錆釉。
68	19-2	—	F-9 曲輪Ⅲ直上	169	陶器天目茶碗	12.0	—		ロクロナデ	釉:灰黄褐(10YR4/2) ～黒(10YR2/1)	精良	良	口縁部1/12残	鉄釉。体部下半外面錆釉。
69	6-2	—	E-8 曲輪Ⅱ直上	118・203	陶器鉄釉平椀	—	—	高台径3.9	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:黒(7.5YR2/1) 素地:灰黄(2.5Y7/2)	0.5㎜の砂粒含	良	底部完存	鉄釉。
70	4-2	—	I-13 包含層	196	陶器灰釉平椀	16.8	—		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:浅黄(2.5Y7/4) 素地:淡黄(2.5Y8/4)	精良	良	口縁部1/8残	灰釉。
71	3-5	—	H-10・11 包含層	55・76	陶器灰釉平椀	16.6	—		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:浅黄(2.5Y7/4) 素地:淡黄(2.5Y8/3)	精良	良	口縁部1/4残	灰釉。
72	3-6	—	H-11、I-12 包含層	185～187	陶器灰釉平椀	16.6	—		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:浅黄(2.5Y7/4) 素地:淡黄(2.5Y8/4)	1㎜の微砂若干含	良	口縁部1/4残	灰釉。
73	3-7	—	E・F-7、H-10・12、I-10・12包含層	56・ 82 115・145 150・176 181・186	陶器灰釉平椀	16.4	6.1	高台径5.4	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:浅黄(2.5Y7/4) 素地:淡黄(2.5Y8/4)	2㎜の砂粒若干含	良	2/3残	灰釉。
74	4-1	—	H-9 包含層	139	陶器灰釉平椀	—	—	高台径5.1	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:浅黄(2.5Y7/4) 素地:淡黄(2.5Y8/4)	2㎜の砂粒若干含	良	底部完存	灰釉。
75	4-4	—	H-10 包含層	81	陶器平底末広椀	9.8	—		ロクロナデ	釉:オリーブ黄(5Y6/3) 素地:灰白(2.5Y8/1)	精良	良	口縁部1/5残	灰釉。
76	3-3	—	G-9、I-12 包含層	111・152	陶器茶入	—	—	高台径3.4	ロクロナデ	釉:オリーブ(5Y5/4) 素地:浅黄(2.5Y7/3)	精良	良	底部完存	灰釉。
77	4-3	—	C-12 包含層	29・127	陶器縁釉小皿	11.8	—		ロクロナデ	釉:オリーブ黄(7.5Y6/3) 素地:灰黄(2.5Y6/2)	精良	良	口縁部1/4残	灰釉。
78	19-4	—	I-12 包含層	192	陶器縁釉小皿	12.0	—		ロクロナデ	釉:オリーブ黄(7.5Y6/3) 素地:浅黄(2.5Y7/3)	精良	良	口縁部1/12残	灰釉。
79	3-4	—	E-7、F-8 包含層	100・149	陶器尊式花瓶	—	—		ロクロナデ	釉:オリーブ黄(7.5Y6/3) 素地:淡黄(2.5Y8/3)	精良	良	肩部3/4残	灰釉。
80	3-1	—	H-12 表土直下	1	陶器香炉	8.6	2.6		ロクロナデ	釉:オリーブ灰(10Y6/2) 素地:灰白(2.5Y8/2)	0.5㎜の砂粒若干含	良	1/2残	灰釉。
81	18-1	—	H-7 包含層	133	陶器小鉢	20.0	—		ロクロナデ	釉:浅黄(2.5Y7/4)	0.5㎜の砂粒若干含	良	口縁部1/6残	灰釉。
82	17-3	—	D-12 包含層	159	陶器小鉢	14.0	—		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	素地:にぶい黄橙(10YR7/4)	精良	良	口縁部1/6残	極めて薄い灰釉。
83	17-2	—	D-12 包含層	129	陶器小鉢	—	—	底径5.0	ロクロナデ	素地:浅黄(2.5YR7/4)	1㎜の砂粒含	良	底部1/4残	無釉。
84	4-5	—	I-12 包含層	193	陶器直縁大皿	31.8	—		体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:浅黄(2.5Y7/4) 素地:淡黄(2.5Y8/4)	1㎜の砂粒若干含	良	口縁部1/14残	灰釉。
85	18-2	—	H-12 包含層	177	陶器直縁大皿	—	—	底径14.0	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	釉:浅黄(2.5Y7/4) 素地:にぶい黄橙(10YR7/4)	1㎜の砂粒含	良	底部1/4残	灰釉。
86	17-1	—	H・I-12、G-8 包含層	49・120 137・178 194	陶器片口鉢	26.6	10.4	高台径10.1	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	青灰(5B5/1)	5㎜の小石含	良	口縁部1/6 底部3/4残	無釉。
87	1-1	—	C-13 表土直下	8	陶器甕	17.8	—		ロクロナデ	黄灰(2.5Y4/1)	5㎜の小石含	良	口縁部1/4残	
88	1-2	—	C-13 表土直下	8	陶器甕	—	—	底径13.4	外面板ナデ、内面ロクロナデ	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	5㎜の小石含	良	底部1/6残	
89	12-8	—	H-10・11 包含層	43・68	青磁盤	12.4	—		ロクロナデ	釉:明緑灰(2.5GY7/1) 素地:灰白(7.5Y8/1)	精良	良	口縁部1/4残	外面に除刻連弁文。
90	14-1	—	H-11、I-10・11 包含層	35・67 75・188	瓦質火舎風炉	28.2	—		ナデ	素地:にぶい黄橙(10YR7/3) 燻し:褐灰(10YR4/1)	精良	良	口縁部1/12残	4片を合成。口縁部から体部上半に四菱文+凸帯+四菱文+凸線。
91	13-1	—	G-8 包含層	54	石製品石鍋	21.4	—	重163.6g	外面ケズリ、内面ミガキ	黒(10YR2/1) ～黒褐(7.5YR3/2)	滑石	—	口縁部1/6残	温石に転用か。
92	9-2	—	J-3 包含層	93	金属製品キセル	0.5～1.0	—		—	—	銅	—	吸口ほぼ完存	

第２－２表　遺物観察表

Ⅵ．結　　語

今回の発掘調査は、奥伊勢地域での中世城館の本格的発掘調査としては川合城跡に次いで２例目である。川合城跡の調査では遺物の出土が無く、築城時期等が決定できなかったのに対し、粟生城跡の調査では山城の調査としては比較的遺物に恵まれ、城の存続時期を限定することができるという大きな成果を得た。

さらに、石積遺構や焼土坑等、この時期の城跡としては調査例の少ない遺構の検出が相次ぎ、当地方の城館研究に貴重な資料を提供することができるものと考えられる。

１．遺物

(1) 時期

山城ではあるものの、比較的多数の遺物が出土している。出土遺物には、土師器の皿、鍋、陶器の天目茶椀、灰釉平椀、甕等があり、これらについて先行研究をもとに、その時期を検討する。

土師器の皿については、新田洋氏の分類[①]による。内弯する口縁部をもち口径10㎝未満、器高2.5㎝以上のものと、口径7～8㎝、器高１㎝未満の非常に扁平なものの２種類がほとんどを占める。前者はＡ５、後者はＢ５に分類されるもので、14世紀後半に想定されている。SZ3からは、口径15㎝、器高3.0㎝の大型のものが１個体のみであるが出土している。形態的にはC_1としてよいであろうか。この皿は､14世紀末に登場し15世紀中頃まで存在するとされている。

土師器の鍋は、伊藤裕偉氏の分類[②]による。口縁部の形態により第２段階Ｃ型式と第３段階のものがある。小型のものが前者、大型のものに後者が多く、両者が並存する。第２段階Ｃ型式は14世紀代に降るものとされ、第３段階については15世紀前半以前が想定されている。したがって、14世紀～15世紀前半の時期幅で想定できる。

瀬戸産の陶器については、天目茶椀は輪高台のものと内反り高台のものがあり、灰釉平椀はすべて削り出し高台である。高台の削りこみは天目茶椀、灰釉平椀共に浅い。藤澤良祐氏の分類[③]によれば、比較的器壁が厚く丸みをもつ57や78は後Ⅰ期に、直線的な体部から屈曲して垂直に立ち上がる口縁部の66･67が後Ⅲ期に属する他は、後Ⅱ期に属するものである。後Ⅱ期は1380～1420年の時期が与えられている。

常滑産の甕87は、縁帯の上方への突出は小さく、下方は体部に接しておらず、中野晴久氏の編年[④]によれば８型式期に属し、14世紀後半であろう。

瓦質土器については、立石堅志氏の分類[⑤]によれば風炉Ⅱとなり、14世紀後半～15世紀前半までのものであろうか。

(2) 組成

前述したように、粟生城跡出土遺物は型式差が少なく、各器種間においても大きな時期差がない。広くみても14世紀後半から15世紀前半までのものである。したがって、これら全てが同時に存在したと仮定して、当時の土器組成を考えてみる。ただし、埋納遺構であるSZ3出土の土師器皿については、この累計から除外した。祭祀的な行為の場合、器種・器形を限定する場合が多く、当時の一般的な組成から遊離する危険を回避するためである。したがって、その大半が包含層や表土からのもので、粟生城での日常の土器組成を表すものと考えられる。

個体数の計測は、口縁部の残存度を累計する方法で行い、小数点以下は切り上げた。口縁部の残存の無い器種については累計できないが、おおまかな傾向は表せるものと考えられる。

その結果、粟生城跡での出土総個体数は71である。その内土師器が約75％を占め、次いで陶器が20％で、その他石鍋、瓦質土器、青磁が１ずつである。このように土師器が圧倒的多数である。

土師器のなかでは皿が大多数を占める。鍋・羽釜１に対し皿４の割合になる。土師器皿では、大型のA_5と小型のB_5では、１：３である。鍋・羽釜：大型皿：小型皿は、１：１：３である。

陶器は、甕が常滑の他は瀬戸産と考えられるが、

天目茶椀には中国産のものが１含まれる。ほとんどが椀類であり、天目茶椀と灰釉平椀は２：１の比率で天目茶椀が優勢である。

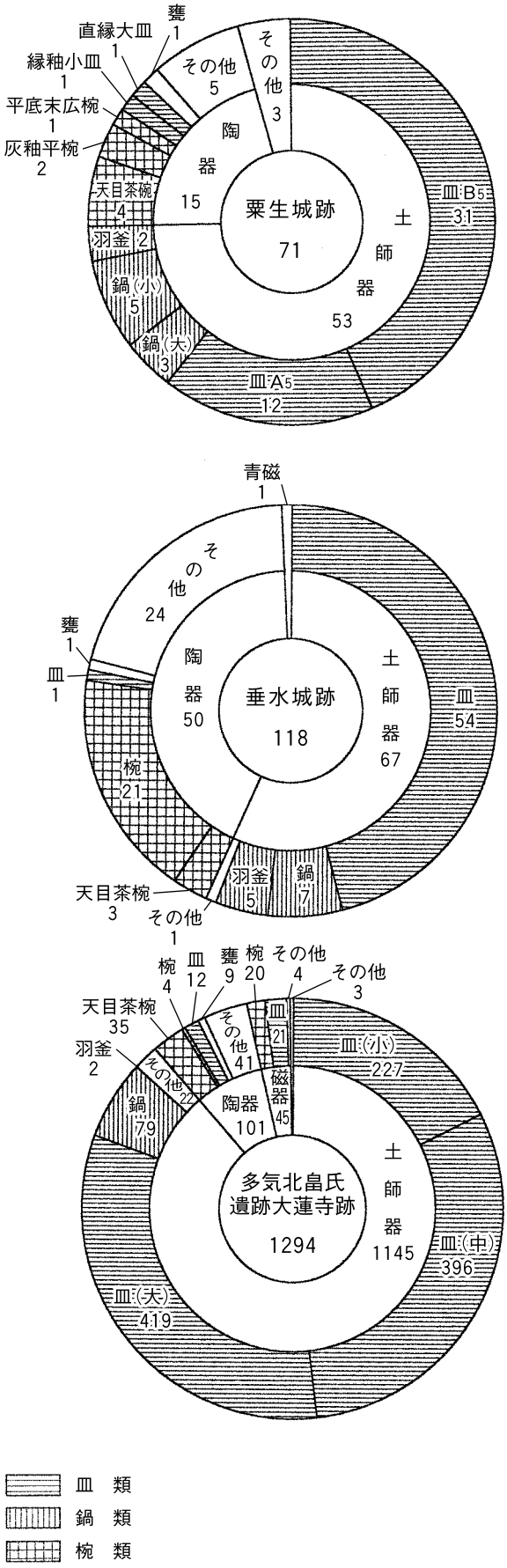
陶器の椀については、既述した様に茶筅の痕跡が認められ、茶道具として使用されたものと考えられる。この場合、供膳具としては､大小の土師器皿に若干の陶器皿が加わるだけとなり、椀類については木製椀等の存在を想定せざるを得ないであろう。また、煮炊具が一定の割合を占め、供膳具も多く、山上ではあるものの生活色を感ぜざるを得ない。

ここで、他の調査例と比較してみることとする。

垂水城跡[6]と多気北畠氏遺跡大蓮寺跡[7]の調査において、個体数の累計が報告されている。垂水城跡は、土塁に囲まれた曲輪や建物の検出等、城館構造も異なるが、山上に位置することについては共通点もある。多気北畠氏遺跡大蓮寺跡は、北畠氏の居館を中心とする中世都市を構成するひとつの寺院跡で、平地に立地する。両遺跡の遺物は粟生城より50年以上後出のもので、それぞれ計測手法も異なるが、おおまかな比較には差し支えないものと判断できる。ただし、垂水城跡については、破片数の単純な累計であるため、計測資料の改変を行った。完形遺物の大きさから、土師器皿１個体分の破片数に対する鍋・羽釜等の破片数を約40倍と想定し、後者の累計値を１/40にして表した。

一見して三者三様を示すが、三者とも土師器が優越し、次いで瀬戸産を中心とする陶器である。青磁・瓦質土器等が占める割合は極僅かである。土師器においては、垂水城についても鍋・羽釜等の煮炊具と供膳具の割合は、約１：４であり、粟生城と類似する。両者には前述したように50年以上の隔たりがあるものの共通の比率を示している。この鍋釜：皿＝１：４の比率は、中世後期の一般的な様子を示している可能性がある。ただし、大蓮寺跡については、この比率ではなく、皿が圧倒する。これは寺院という宗教施設である影響と推測したい。

次に、瀬戸産を中心とする陶器の比率をみる。前述した大蓮寺跡の特殊性を回避するために、皿を除く土師器との比率を見てみることにする。粟生城跡では、1.5：１で陶器がやや多い。垂水城では４：１、大蓮寺跡では１：１で、粟生城跡と大蓮寺跡がよく似



第16図　個体数比較図

た比率を示すのに対し、垂水城跡が突出して多いことが判る。垂水城が宇野隆夫氏の設定する４期[8]の時期に相当することから、「陶磁器が中世的な世界から脱却し・・・近世への動き」[9]が始まっているとするならば、時期による差と考えて良さそうである。そうした場合には、大蓮寺跡では遺物組成のうえで、近世への動きの遅れを見出せることになる。

このようにみてみると、僅か３例の比較ではあるものの、粟生城跡の土器組成は中世後期の平均的な城館の様相を示している可能性があり、山城という立地が土器組成に影響を与えていないようである。粟生城跡の調査では、建物跡の検出は無かったが、山城という立地ではあるものの詰城というよりも、居住性のある城館であることが遺物のうえから想定できそうである。

(3) 出土状況

第17図は、地区別の出土遺物数である。一見して判るように、その出土位置は限定されたものである。また、土師器と陶器ではその分布に差がない。曲輪Ⅰの南東側と北東側の斜面からの出土がほとんどである。53・54・60・73では、両側から出土した破片が接合することを確認している。以上から、これらの遺物のほとんどが曲輪Ⅰで使用され、破損した後、曲輪Ⅱ側（北東側）と盆地側（南東側）へ投棄された状況を示している。ただし、南西側斜面には全く投棄していないが、その意味するところは不明である。

これらの遺物は、前述したように、生活色が強く、曲輪Ⅰにおいて炊事や飲食、喫茶が行われていたことを示す。鍋に付着した煤や曲輪Ⅰに残る多数の焼土痕がこれを証明するものと考えられ、固定した炉を設けず、五徳等[10]を用い随所で煮炊を行ったものと考えられる。居住域とすれば、３方を土塁状の曲輪Ⅲや岩盤で囲まれた曲輪Ⅱが最適であると推測されるが、あえて、風当りが強く火付が困難な曲輪Ⅰにおいて炊事を行っていることが注目できる。このことから、最高所の曲輪Ⅰへの固執が窺え、ここでの日常的な「見張り」が行われていた結果と推測しておく。

２．城の存続時期

既述したように、粟生城から出土した遺物については、各器種とも14世紀後半～15世紀前半までに集約される。その中で、SZ3出土遺物が築城時期を示す資料と考えられる。既述した土師器ⅢＣ１が出現しているものの、他のものはA_5であり、新田氏の編年[11]では、第Ⅱ期から第Ⅲ期への変換期にあたり、築城時期の上限が14世紀末と限定できる。廃絶については、土師器Ⅲでは、第Ⅲ期の遺物は前述したようにC_1が１個体のみで、他は全て第Ⅱ期の遺物であるものの15世紀中頃までは想定せざるを得ない。陶器からは、瀬戸製品に後Ⅲ期[12]の遺物が若干含まれるが、この時期に現れる擂鉢の出土が無く、陶器からは、後Ⅲ期でも早い時期に廃絶した可能性が考えられる。ただし、陶器においては、その伝世を考慮に入れざるを得ず、また、鉢類については出土の絶対数が少ない状況からの考察である。また、土師器Ⅲについては単純な器形や調整のため、その変遷に不明確な要素も多く、実年代の特定においても有効な資料も限られる現状にある。したがって、上記を勘案して城の下限についてはやや引き下げて、その存続期間を14世紀末～15世紀中頃までの約60年ほどに想定しておく。

３．城館構造

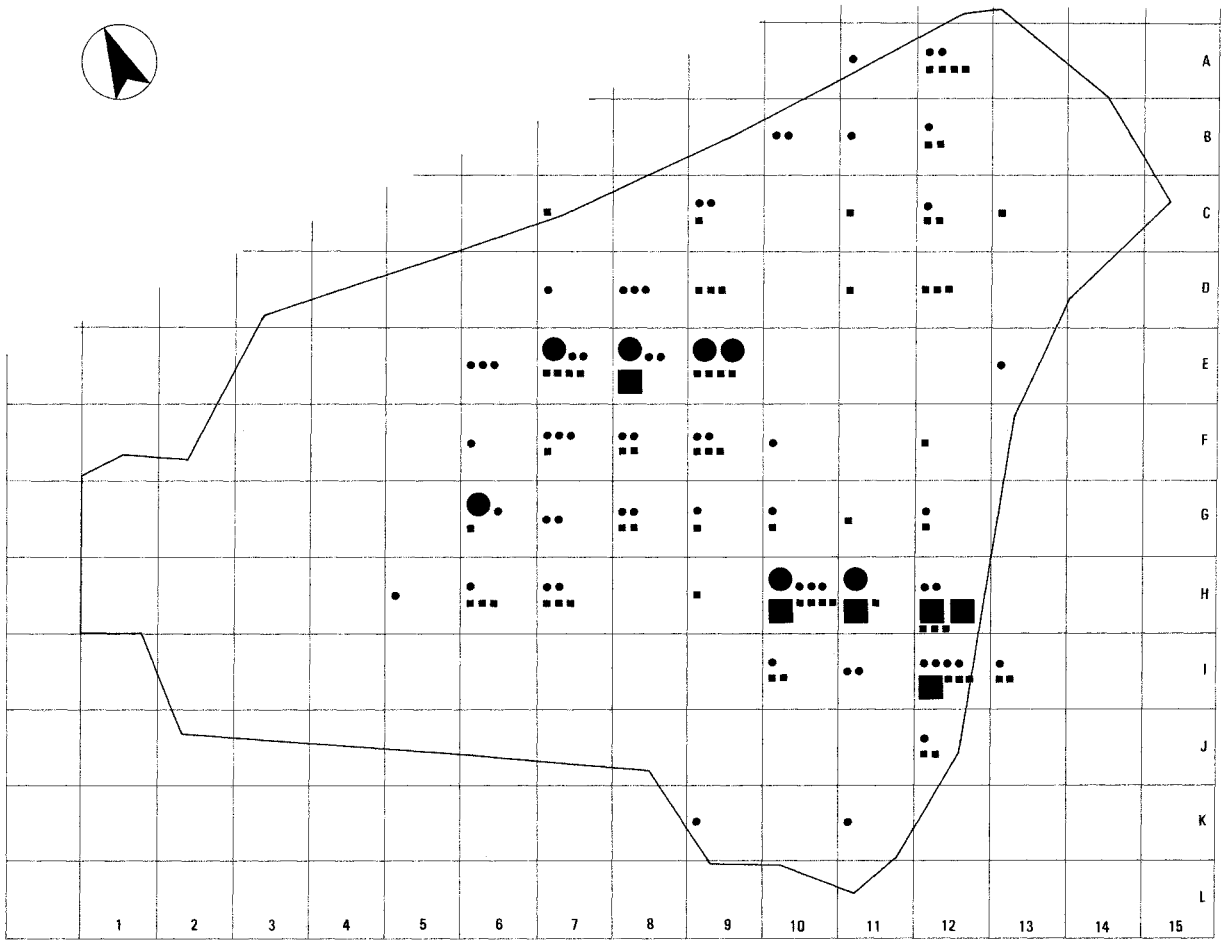
(1) 構造

近隣の発掘調査例としては既述した川合城跡(31) があげられる[13]。遺物の出土が無く時期を限定できていないが、集落に向けて延びる尾根の先端付近に立地し、背後を堀切で切断し、尾根に沿って段状に曲輪を配置する比較的単純な構造は粟生城跡と共通したものである。調査例はこの一例のみであるが、現況観察からこの近辺には類似した構造の城館が散見できる。佐原城跡（29）においてはその構造が類似する他に内部の削平が弱いこと[14]においても川合城跡と共通する。また、粟生城跡から15㎞上流の赤坂城跡においては一部に低い不定形な土塁を伴い[15]、曲

輪数は少ないものの粟生城跡のものと酷似する。この不定形な土塁は大内山城にもみられるもの[16]である。これらの城館は、交通の要衝を見下ろす位置に築城されており、粟生城跡、佐原城跡、赤坂城跡の３城は、背後の峠により櫛田川水系の飯高郡と連絡でき、これら３城が類似した構造をもつことは、興味深いことである。ただし、野後城（34）のように全く異なる構造をもつ[17]山城も近辺には存在し、粟生城跡近辺の城館形態は一元的には捕らえられない状況でもある。

(2) 石積

城の一部にではあるが、石積がみられる。SZ8のように曲輪の縁に石垣を配置する例は丹生川上城にもみられるが、時期は16世紀代であり[18]、粟生城とは50年以上の差がある。一般的に城に石垣が用いられるのは16世紀中葉以降とされ、多気北畠氏遺跡北畠館跡が15世紀前半で突出して古い[19]。粟生城のものは時期的にはこれに匹敵する。しかし、北畠館跡のものは、斜面全面を石で化粧するが、粟生城跡のものはごく一部に止まり、視覚的には大きく異なる。土止めとしての必要最小限の構築を、岩山であるため石の入手が容易であったために用いたものと理解することが普通であろう。ここで、気に留める事項がある。SZ8には川原石が１個使用されている。また、ＳＡ４上面にも石積ではないものの川原石が１個検出された。石の入手が容易であるにもかかわらず、川原石を運び上げている。この川原石の意味は不明であるが、単に、手近な石を土止めのために積み上げただけではない可能性も残る。石積が用いられているのは曲輪Ｉのみである。曲輪Ｉが当城における特別な曲輪であったならば、竹田憲治氏の言う『境界・結界をなす』[20]という機能を期待して石が積まれたことも否定はできない。



土師器　● 5個体　• 1個体　　陶器　■ 5個体　▪ 1個体

第17図　出土遺物分布図

（３）焼土坑

SF1･2･7の３基の焼土坑を検出した。土坑の様子は３基とも若干異なるものの、おおむね同様な特徴を示す。最も象徴的なSF7について再度特徴を整理する。

・ 一辺60㎝の正方形、深さは浅く10㎝。
・ 掘形を掘削の後、粘土状の土を充填して成形する。
・ 底部、壁ともによく焼けている。
・ 埋土には焼土、炭は少なく、灰原の形成もない。

中世城館において、熱を受けた土坑は県内の調査例でも散見される。力尾城跡SF7[21]は不定形な形態や埋土に焼土・炭を含むこと等、粟生城跡のものと大きく異なる。赤木城跡SK3・SK7は土坑壁が良く焼けているのに対し埋土に焼土・炭を含まない等、共通点もあり、「鍛冶屋敷」という伝承から鉄滓出土は無いものの鍛冶遺構の可能性を推定している[22]。しかし、その立地は山裾の屋敷地であり、粟生城のものと大きな相違点である。粟生城跡のものは３基とも眼下に盆地を見下ろせる位置にあり、曲輪ⅠのSF1・２は城の中心地である。この様な位置に鍛冶遺構を想定することは無理が大きいと考えられる。

他に城内で火を取り扱う施設としては、炊事や狼煙が考えられる。炉としては灰の堆積が無く、１回の焼成毎に炉内を清掃したと想定するのは無理が大きい。残る狼煙施設については、報告例がほとんど無く、広島県三ツ城跡[23]を知るのみである。三ツ城跡土坑は、直径、深さ共に１ｍ以上の規模をもち、粟生城のものと規模、構造等が大きく異なる。ただし、立地は最高位曲輪で粟生城と共通点もある。さて、SF1・７は、粘土状の土を貼り付け、非常に丁寧に作成されている。狼煙を上げることと丁寧な構造は安易に直結できない事柄と考える。狼煙の燃料が杉葉であれば、三ツ城跡の土坑では適当な規模であるが、粟生城跡SF1・７は小規模に過ぎる。燃料が狼の糞[24]等動物の糞であれば、十分な規模と考えられるが、丁寧な構造が必要とは思えない。油が燃料であれば、丁寧な構造は必要であるが、これを使用した根拠は全くなく、さらに、この砂混じりの粘土では油の浸透は防げないのではないだろうか。この様に、狼煙施設と仮定しても疑問が多く、類例を期待する状況である。

（4）登城路

比高差80ｍの尾根上に位置する粟生城への登り道は、虎口が不明確なこともあって確定できないが、現況観察から推測を試みる。

城の南西側山道を谷に沿って登る山道がある。この道を登り詰め、最後に道は不鮮明になるが、急斜面を上がって到達した尾根上を東へ歩けば、堀切SD5に至ることができる。仮に、このSD5に橋が架けられていたと仮定しても、最高位の曲輪Ⅰの土塁SA4上に到達することになり、城道としては不適当と思わざるを得ない。

城の北側の谷を登れば急坂も無く、比較的容易に城に接近することができる。発掘調査においても使用した通路である。この通路は地元住民の教示により知るところとなったものであり、当時の登城路が伝承されたものであるならば、その有力候補となり得る。しかし、最後は、急斜面を移動することになり、至る先が堀切SD5の底部で、その先へは進めない。曲輪Ⅱへも土塁上に露呈した岩盤に阻まれる結果となる。

曲輪Ⅲ～Ⅴへ続く尾根の延長上は、緩やかな傾斜が続き、堀切等はない。しかし、この尾根の南側は急斜面、尾根の終点も谷に向かっての急斜面であり、登城には困難である。唯一、曲輪Ⅴから北側の谷へ下れば比較的容易に前述した通路に出ることは可能である。しかし、現況観察では通路の痕跡は認められなかった。

この様に、三者とも断定する根拠に乏しいが、可能性として、最後にあげた北側の谷から曲輪Ⅴに至る経路を有力視したい。

４．城主

城主を示す資料の出土は無く、不明とせざるを得ない。時期的には、南北朝の騒乱が終結し、室町幕府が最も安定した時期に粟生城が築かれることになる。この頃、当地方近辺の軍事的緊張関係では、北畠満雅が室町幕府に対して起した反乱や後南朝の争乱、やや時期は降るが、北畠氏による伊勢神宮権益

への蚕食があげられる。既述したように、背後の峠により飯高郡方面と結ばれるのであれば、北畠満雅勢力の南辺を守る位置付けが可能性のひとつにあげられる。雲出川流域の中世城館については、その立地・構造をもとに竹田憲治氏により分類され、北畠氏直轄の城館形態が特定されている[26]。この分類を宮川流域に応用するには慎重を要するが、粟生城はこれに適合せず、北畠氏の直接の影響は薄いものと考えられる。

次に、軍事的緊張の有無は別にして、「日常的な見張り」としての機能を重視した場合、次にあげる文献に注目したい。文明十年の『内宮引付』に「…兼又此河船者、為御饌船･･･祭礼並諸節之時者、待申奉渡事、･･九月三日　　氏経　判　　見瀬殿　まて殿　　内宮一神主」「･･･それニつき候てハ、見瀬かわのふなとの事、･･･九月廿日　まて　判」とあり、その他にも、内宮一禰宜荒木田氏経から見瀬殿やまて殿への書状、三瀬能実から内宮一禰宜への書状がみえる[27]。「三瀬川の船渡事」という交通の要所について三瀬氏や真手氏が大きな影響力をもっていたようである。三瀬は官幣使が内宮別宮の滝原宮へ向かう交通拠点であるため、両氏は伊勢神宮と強い関係をもっていたものと考えられる。三瀬氏の拠点が下三瀬城等、三瀬谷地区にあることは想定し得ることであるが、既述した御薗の存在や粟生城が三瀬谷への入口をおさえる位置にあたること等から、この三瀬氏の支城として粟生城を位置付けることも一案である。

資料の信憑性の問題はあるが、『北畠家臣録』[27]には北畠氏の家臣として「粟生氏」の名がみえる。この粟生氏は、南紀徳川史に「元禄十四年巳正月御改地士姓名・・・・粟生　粟生左太夫」の記載があり、この人物は『御用留』にもその名をみることができる[28]。紀州藩は当初、由緒ある家柄のものを地士として取りたてた[29]ようで、この粟生氏が中世に遡る可能性はあるものと考えられ、北畠氏との主従関係は別にして、城主候補となり得るであろう。

5．おわりに

粟生城は小規模であり、曲輪Ⅰが石積状遺構の存在等により特別視され、最高所の同曲輪において炊事・飲食・喫茶が行われていた可能性から、詰城的な機能は言うまでもないが、日常的な見張り場としての機能を期待された支城であるものと考えられる。伊勢神宮の力を背景にし、交通・流通の監理に力をもっていた三瀬氏等の在地勢力が、配下の粟生氏をこの城に常駐させ「見張り」を行っていたと推測することも可能であろう。戦国大名化しつつある北畠氏に対する緊張関係も背景にあるのかもしれない。この後、この在地勢力は北畠氏に組み込まれていくなかで、山本浩之氏が指摘する北畠氏の「流通経済重視の思考」[30]の一翼を担うことになっていくものと推測される。

［註］

① 新田　洋　「中・南勢における中世土師器－特に「在地系」Ⅲ－の変遷と地域色解明への一視点」『マージナル№９』　愛知考古学談話会　1988.10

② 伊藤裕偉　「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Miehistory　vol.1』　三重歴史文化研究会　1990.5

③ 藤澤良祐　「瀬戸古窯址群―古瀬戸の編年―」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ｘ』　瀬戸市歴史民俗資料館　1991

④ 中野晴久　「赤羽・中野「生産地における編年について」」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』　日本福祉大学知多半島総合研究所　1994年７月

⑤ 立石堅志　「10.瓦質土器〔1〕奈良火鉢」『概説中世の土器・陶磁器　中世土器研究会編』　真陽社　1995年12月９日

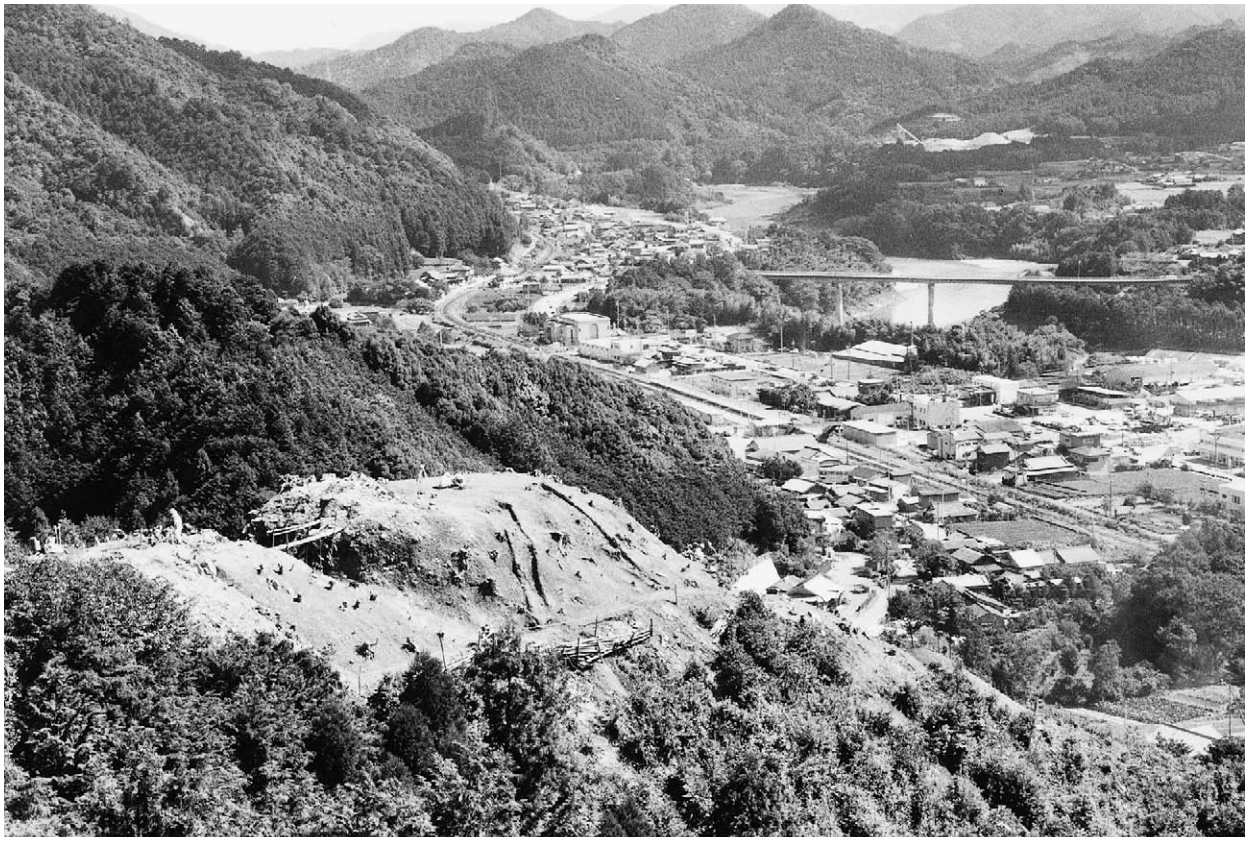
⑥ 米山浩之　『垂水城跡発掘調査報告』　津市教育委員会　200.3

⑦ 伊藤裕偉　『多気遺跡群発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター　1993.3

⑧ 宇野隆夫　「中世陶器の生産と流通について」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　第５輯』　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　1997

⑨　前掲⑧に同じ。
⑩　新田　洋　「三重の中世食生活文化を垣間見る（上）」『Miehistory　vol.1』　三重歴史文化研究会　1990.5
⑪　前掲①に同じ。
⑫　前掲③に同じ。
⑬　下村登良男　『川合城跡発掘調査報告』　大台町教育委員会　2001.3
⑭　竹田憲治　『伊勢の中世　第73号』　伊勢中世史研究会　平成14年３月１日
⑮　成瀬匡章　『伊勢の中世　第65号』　伊勢中世史研究会　平成13年７月20日
⑯　成瀬匡章　『伊勢の中世　第38号』　伊勢中世史研究会　2000年５月19日
⑰　山本浩之　「南伊勢諸城の軍事性」『第18回全国城郭研究者セミナー　テーマ「本拠における城郭体制」』　中世城館研究会　2001年８月
⑱　杉谷政樹・久志本鉄也　『丹生川上城跡発掘調査報告』　三重県教育委員会　1985.3
⑲　竹田憲治他　『多気北畠氏遺跡発掘調査報告－北畠氏館跡－』　三重県美杉村教育委員会　1998.3
⑳　竹田憲治　「石垣・石積についての覚書」『Miehistory vol.12』　三重歴史文化研究会　2001.4
㉑　片岡博・新名強　『力尾城跡発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター　2001.3
㉒　岩本直樹・森川常厚　『国史跡　赤木城跡発掘調査概要』　三重県紀和町教育委員会　1996.3
㉓　奥田状紀・岡野幸夫　『三ツ城跡発掘調査報告』　広島県教育委員会　1987.3
㉔　陳　舜臣　『中国の歴史　第２巻』　平凡社　1981
㉕　竹田憲治　「伊勢の中世城館と北畠氏」『伊勢北畠氏と中世都市・多気』　美杉村教育委員会　2001年10月
㉖　三重県　『三重県史資料編　中世１上』　平成九年五月三十一日
㉗　服部哲雄・芝田憲一　『三重・国盗り物語』　服部周平　昭和49年６月25日
㉘　松阪市史編さん委員会　「南紀徳川史」『松阪市史第11巻史料篇近世（１）』　1982.9.２０
㉙　松阪市史編さん委員会　『松阪市史　第十三巻　史料篇　御用留』松阪市　1981.8.25
　堀内　信　「南紀徳川史」『松阪市史　第十一巻　史料篇　近世（1）　政治』松阪市史編さん委員会　松阪市　1981.8.25
㉚　栗谷節ニ　「第三章近世」『大台町史　通史』　大台町　平成八年三月三十一日
㉛　前掲⑰に同じ。

調査前風景（西から）



調査風景（西から）

ＰＬ２

近世熊野街道から粟生城跡を望む（東から）

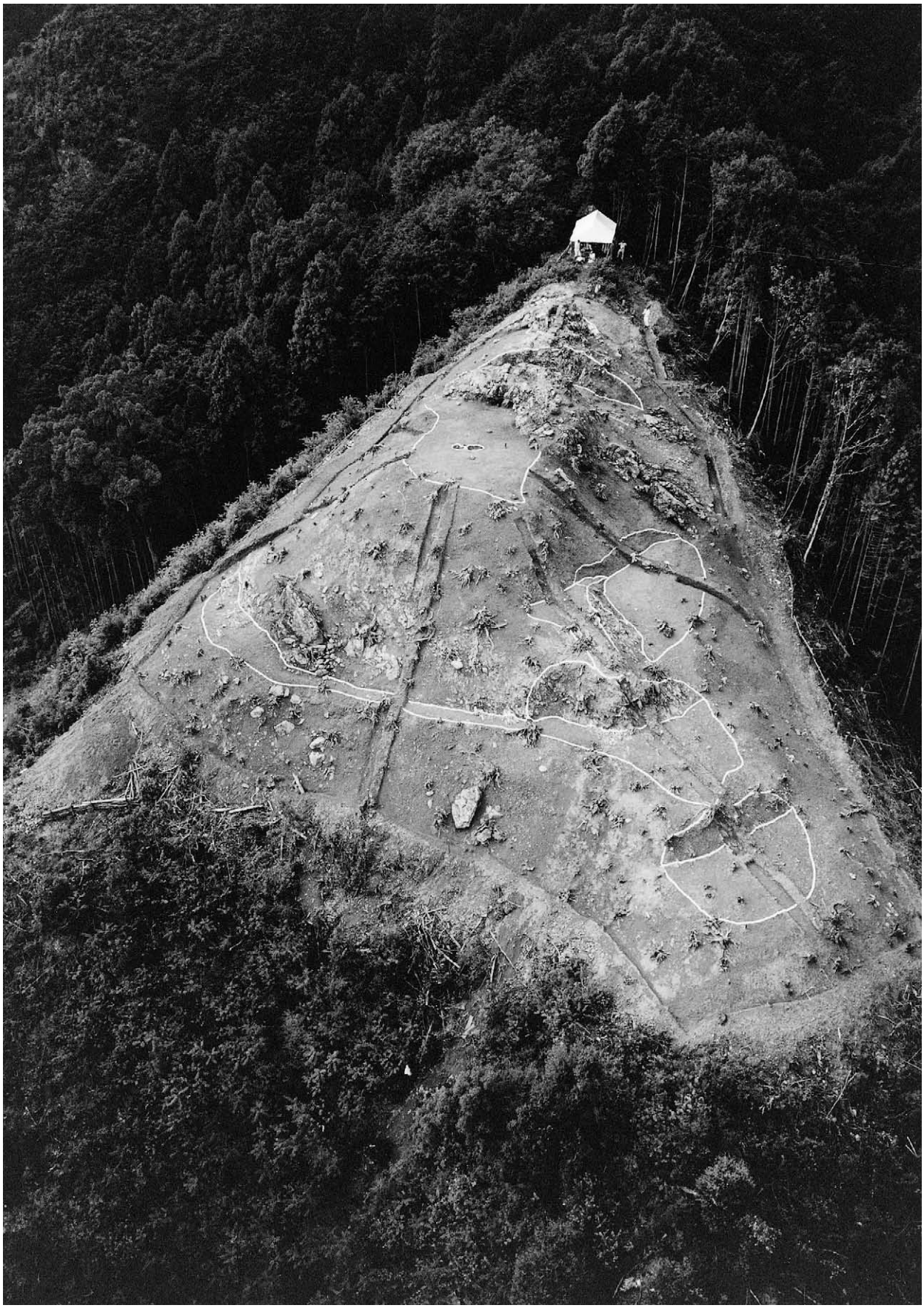
粟生集落から粟生城跡を望む（南から）

中世熊野街道想定地から粟生城跡を望む（南から）

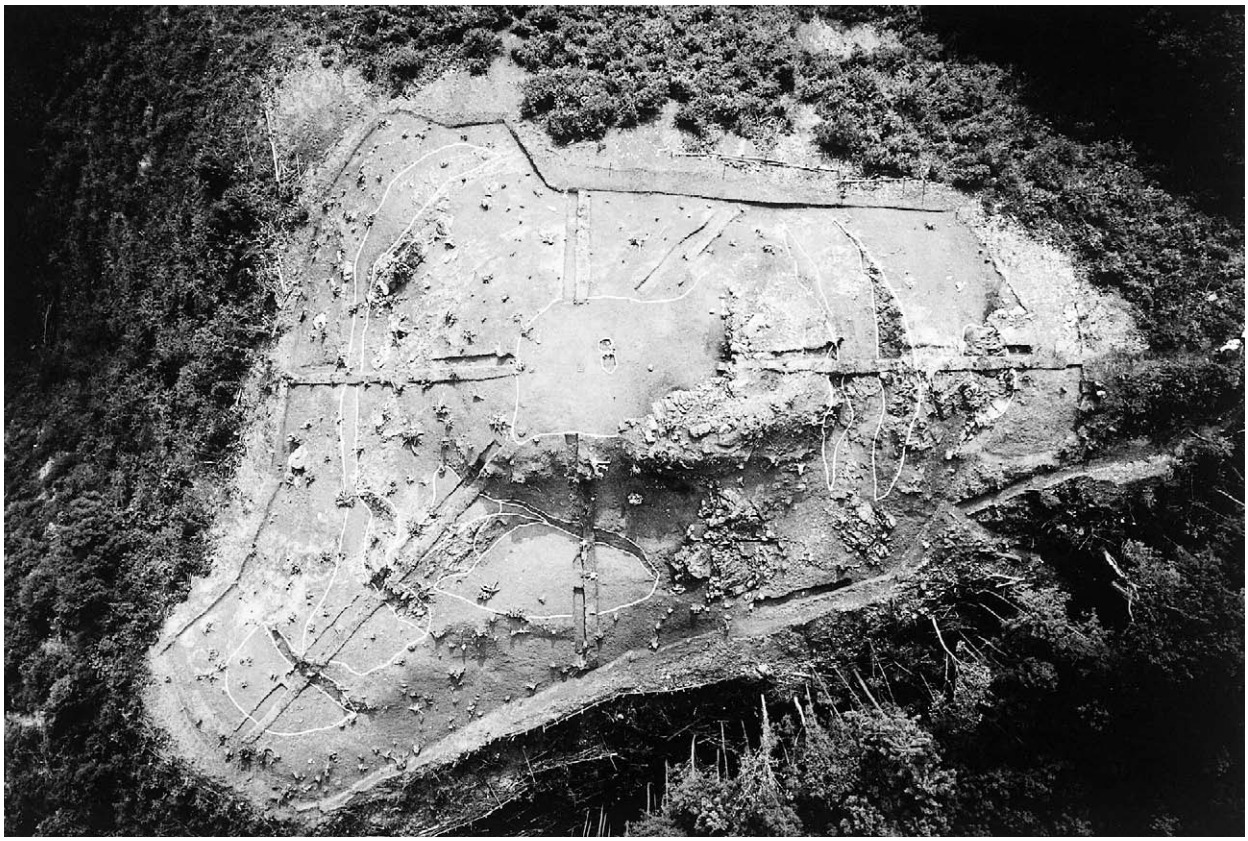
曲輪Ⅰ調査前風景（北西から）

調査区全景（北東から）

調査区全景（西から）



調査区全景（東から）



調査区全景（上空から）

調査区全景（南西から）

曲輪Ⅰ全景（南東から）

ＳＡ４・ＳＤ5（上空から）

ＰＬ８

曲輪Ⅰ（西から）

曲輪Ⅰ（西から）

曲輪Ⅰ（南東から）

ＳＡ４（北東から）

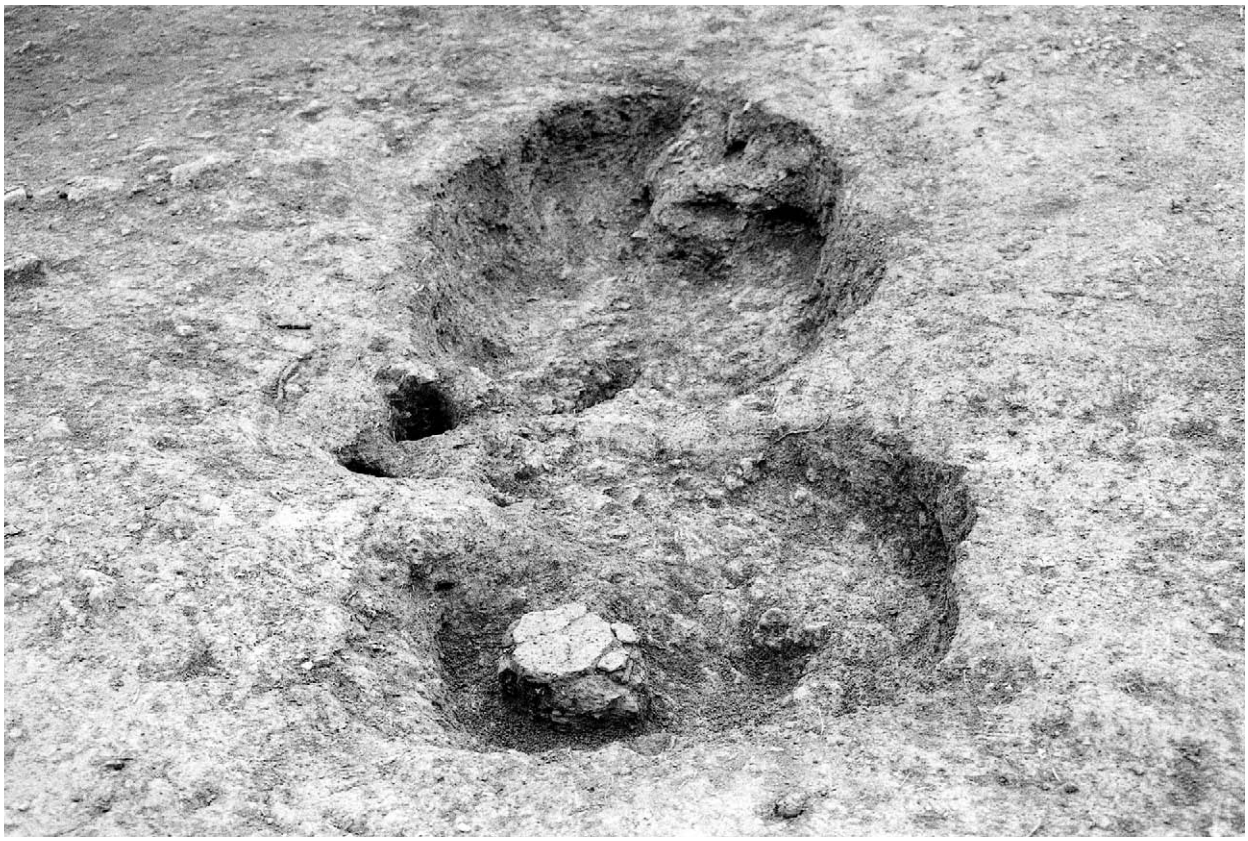
ＰＬ10

ＳＡ４（南から）

ＳＡ４石積（南から）

ＳＦ２断面（南から）

ＳＦ１断面（北から）



ＳＦ１・２（南から）

ＳＦ１（西から）

曲輪ＩとＳＦ１・2(北から)

ＳＦ１・2(北から)

ＳＺ８（北から）

ＳＺ８（東から）

ＳＺ３（南から）

ＳＺ３遺物〈２～７・13〉出土状況（南から）

ＳＺ３出土遺物撤去後（南から）

ＳＺ３出土遺物撤去後（南から）

ＳＤ５（南から）

ＳＤ５断面（南から）

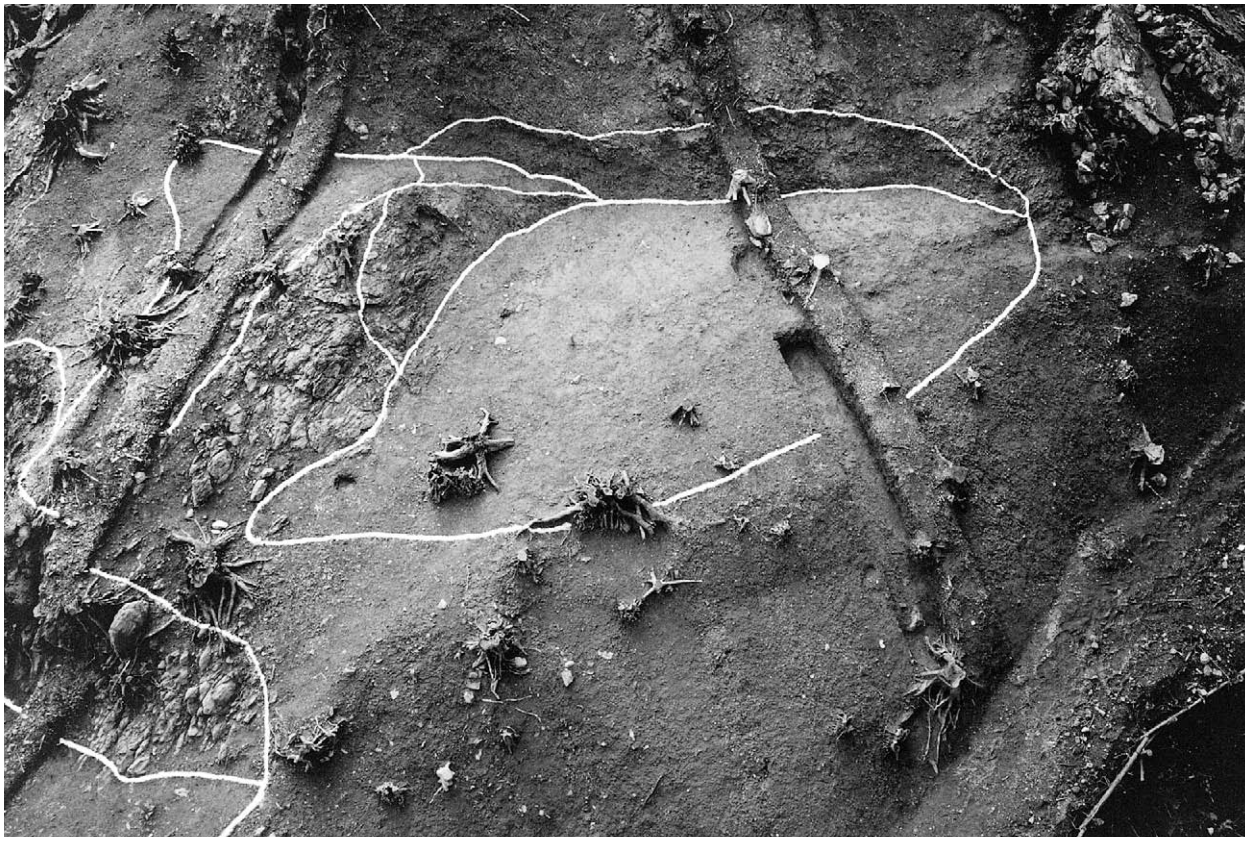
ＳＤ５（南から）

ＳＤ５（北から）

ＳＤ５（南から）

ＳＤ５（南東から）

ＳＤ６（南から）



曲輪Ⅱ・Ⅲ全景（北から）

曲輪Ⅱ全景（西から）

曲輪Ⅱ（東から）

曲輪Ⅱ転石出土状況（北西から）

曲輪Ⅱ土層（北西から）

曲輪Ⅱから曲輪Ⅰを望む（北東から）

曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面遺物〈53〉出土状況（北西から）

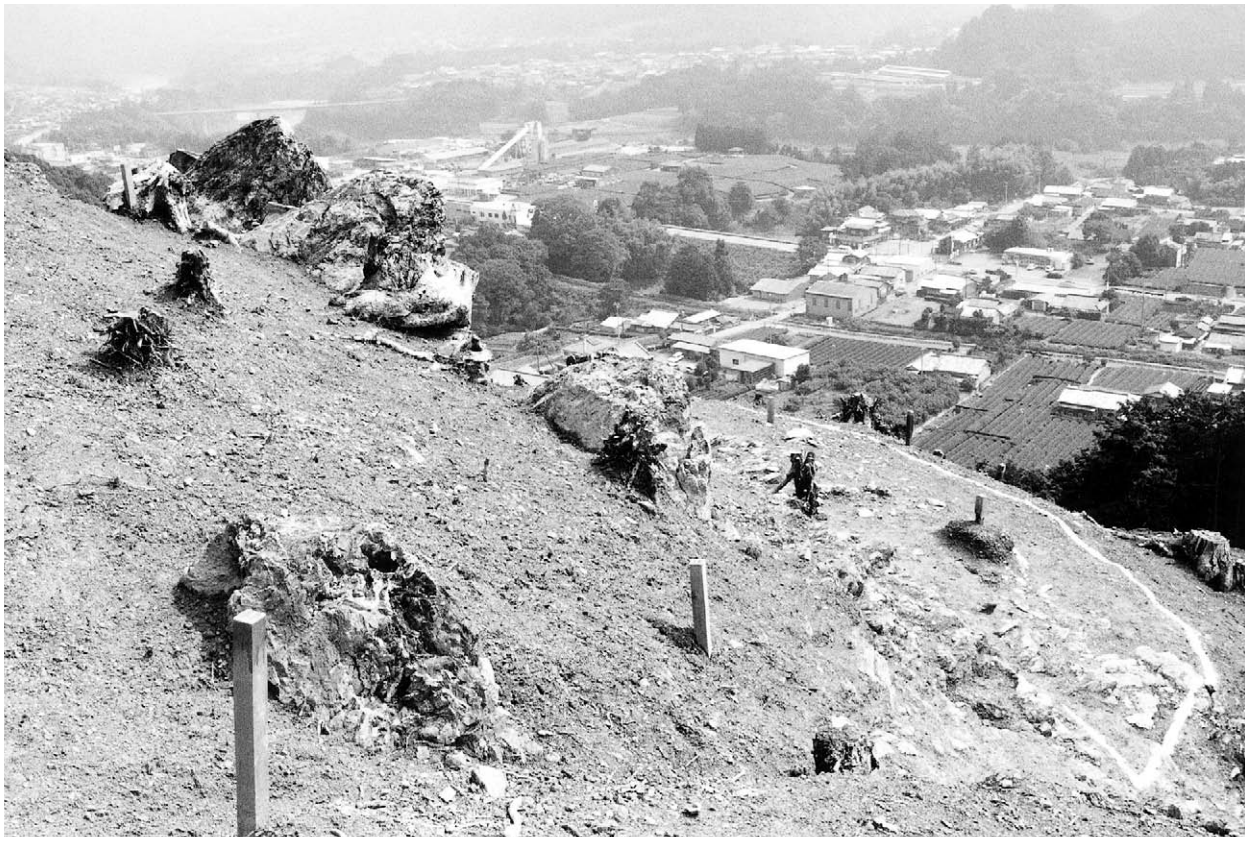
曲輪Ⅰ・Ⅱ間斜面遺物〈55〉出土状況（北西から）

曲輪Ⅳ・Ⅴ全景（南西から）

ＳＦ７（西から）

ＳＦ７（北西から）

曲輪Ⅴから曲輪Ⅰ・Ⅲ・Ⅳを望む（北東から）



曲輪Ⅵ（西から）

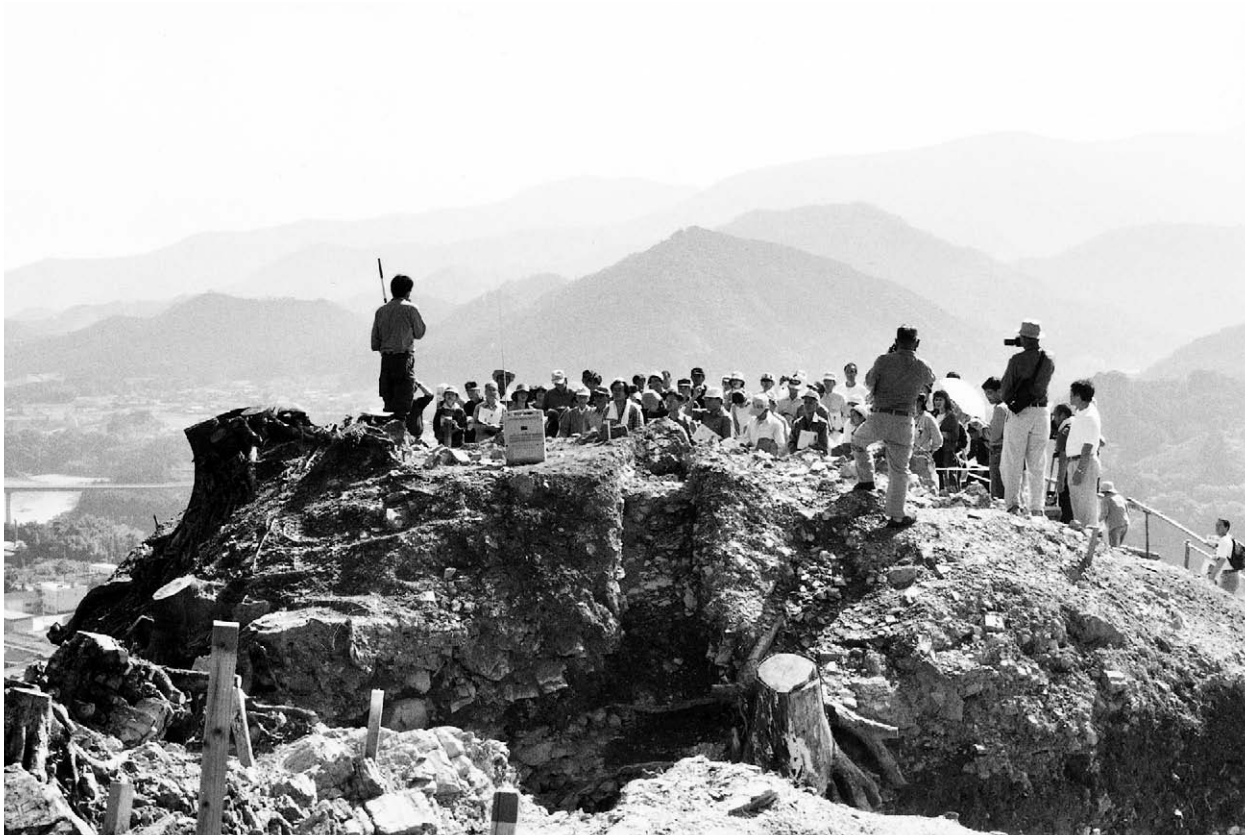
曲輪Ⅵ（西から）

帯曲輪状通路（北東から）

帯曲輪状通路と曲輪Ⅲ（西から）

帯曲輪状通路と曲輪Ⅵ（北東から）

曲輪Ⅰ調査風景（北西から）



現地説明会風景（北西から）

P L 30

出土遺物

出土遺物

出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	あ おじょうあと
書 名	粟 生 城 跡
副 書 名	近畿自動車道尾鷲勢和線（紀勢～勢和間）埋蔵文化財発掘調査報告
巻 次	Ⅰ
シ リ ー ズ 名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	238－1
編 著 者 名	森川　常厚
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596-52-1732
発 行 年 月 日	西暦　2002年11月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
あおじょうあと 粟生城跡	みえけんたきぐん 三重県多気郡 おおだいちょうあお 大台町粟生	443		34° 24′ 50″	136° 27′ 23″	20010621 ～20011120	1,600	近畿自動車道 尾鷲勢和線 (紀勢～勢和間) 建設に伴う 事前調査

所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
粟 生 城 跡	城 館	室 町	曲 輪 堀 石 積 焼 土 坑	土 師 器(皿、鍋、羽釜) 施釉陶器(天目茶碗、灰釉平椀、香炉、尊式花瓶、直縁大皿、縁釉小皿) 陶 器(鉢、甕) 瓦質土器(風炉) 青 磁(皿) 石 鍋	中国産天目茶碗あり。

三重県埋蔵文化財調査報告　　２３８－１

粟　生　城　跡

２００２．11

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　有限会社 北 尾 印 刷